

A. 研究助成

1. 2002年度パツへ研究奨励金 I - A - 1 (特定研究助成・特別) 配分一覧

[金額単位：円]

| No. | 学科 | 氏名 | 研究課題 | 配分額 |
|-----------|------|------|---|-----------|
| 1 | 日本文化 | 櫻井 進 | 戦前・戦後日本ナショナリズムの思想史的研究——連続面と非連続面 | 1,000,000 |
| 人文学部 1件 | | | | 1,000,000 |
| 2 | 情報通信 | 宮澤 元 | 分散ファイルシステムにおけるファイルシステム層とストレージ層の連携に関する研究 | 1,000,000 |
| 数理情報学部 1件 | | | | 1,000,000 |
| 合計 2件 | | | | 2,000,000 |

2002年度パツへ研究奨励金 I - A - 2 (特定研究助成・一般) 配分一覧

*印は、赴任後満3年以内の新任教員で助成金に新任加算される。

[金額単位：円]

| No. | 学科 | 氏名 | 研究課題 | 配分額 |
|----------|--------------|---------|---|-----------|
| 1 | 人類文化 | 斎藤 衛 | 移動と照応関係 | 337,000 |
| 2 | | 青柳 宏 | 機能範疇と比較統語論 | 337,000 |
| 3 | | 谷口 佳津宏 | サルトル研究 | 337,000 |
| 4 | | 吉田 竹也 | バリ宗教の民族誌論的研究—「観光地の人類学」研究試論 | 337,000 |
| 5 | | *石原 美奈子 | 動物と人の共生の論理—エチオピア南西部におけるジャコウネコ飼育に関する研究— | 407,000 |
| 6 | 心理人間 | 石田 裕久 | 「総合学習」の導入をめぐる諸問題 | 337,000 |
| 7 | | 神谷 俊次 | 記憶システムにおける自伝的記憶の位置づけに関する研究 | 337,000 |
| 8 | | 津村 俊充 | ラボラトリ・メソッドによる体験学習の効果性に関する研究 | 337,000 |
| 9 | | 加藤 隆雄 | 心理学への関心の社会学的分析 | 337,000 |
| 10 | | *中村 和彦 | 体験学習方式による授業が学生の人的成長に及ぼす効果について | 407,000 |
| 11 | 日本文化 | 細谷 博 | 近代文学に於ける小説・批評論の研究 | 337,000 |
| 12 | | 丸山 徹 | 「大航海時代の語学書」としてのキリシタン文献—ブラジル、インド現地語諸文献との対比を中心にして | 337,000 |
| 13 | | 美濃部 重克 | 平家物語・近代小説研究 (伝承文学研究の視座から) | 337,000 |
| 14 | キリスト教 | 鳥巢 義文 | キリスト教的神理解の研究 | 337,000 |
| 15 | | 奥山 倫明 | エリアーデ宗教学形成前史に関する基礎的研究—戦間期ルーマニアでの言論活動を中心に— | 202,000 |
| 人文学部 15件 | | | | 5,060,000 |
| 16 | 英米 | 藤本 博 | ヴェトナム戦争をめぐる国際関係の歴史的研究 | 337,000 |
| 17 | | 松永 隆 | ZPD and Interaction in Classrooms | 337,000 |
| 18 | | 村杉 恵子 | 統語理論と文法獲得 | 337,000 |
| 19 | | 鈴木 達也 | ミニマリスト・プログラムにおける英語動名詞の構造研究 | 337,000 |
| 20 | スペイン・ラテンアメリカ | 木下 登 | ハビエル・スピリの形而上学と日本 | 337,000 |

| No. | 学科 | 氏名 | 研究課題 | 配分額 |
|------------|------|-------------------|---|-----------|
| 21 | ドイツ | 横田 忍 | 水の精の文学 | 337,000 |
| 22 | | 鈴木 宗徳 | 社会学理論におけるグローバル化の問題 | 337,000 |
| 23 | アジア | 松戸 庸子 | グローバル化時代の中国家族変動の定性分析 | 337,000 |
| 24 | | 森山 幹弘 | 翻訳と文化の変容：19世紀のインドネシア、スダ語文化において | 337,000 |
| 25 | | 宮沢 千尋 | アジアにおける「市場 (market)」の固有論理に関する学際的研究 | 337,000 |
| 外国語学部 10件 | | | | 3,370,000 |
| 26 | 経済 | 中矢 俊博 | ジョン・メイナード・ケインズと文化・芸術活動 | 337,000 |
| 27 | | 上田 薫 | 現代産業組織論の視点から見た過剰生産能力論争の歴史的意義 | 337,000 |
| 28 | | 宮澤 和俊 | 少子高齢化の経済効果 | 337,000 |
| 29 | | 唐澤 幸雄 | 小国開放経済における安定化政策と成長 | 337,000 |
| 30 | | *小林 佳世子 | 法と経済学 | 407,000 |
| 経済学部 5件 | | | | 1,755,000 |
| 31 | 経営 | 高橋 弘司 | 組織コミットメントの形成メカニズムならびに時系列的変化要因の探索 | 337,000 |
| 経営学部 1件 | | | | 337,000 |
| 32 | 法律 | 中谷 実 | 我が国における政教分離をめぐる司法消極主義と積極主義 | 337,000 |
| 33 | | 高橋 広次 | アリストテレスの法—国家思想研究 | 337,000 |
| 34 | | 田中 実 | 中世・近世法解釈方法論 | 337,000 |
| 35 | | *伊藤 司 | 内縁法理の再検討 | 407,000 |
| 法学部 4件 | | | | 1,418,000 |
| 36 | 総合政策 | Cavallar, Osvaldo | The Origins of Legal Medicine | 337,000 |
| 37 | | *深井 慈子 | 持続可能な世界秩序構築と貿易・投資のシステム改革—EUとOECDにおける取り組みを通して考える | 407,000 |
| 38 | | 小林 武 | 憲法改正とその手続法制定をめぐる法理上の諸問題の研究 | 337,000 |
| 39 | | Lim, Robyn | The Geopolitics of East Asia | 337,000 |
| 40 | | *松戸 武彦 | 中国市場経済化に伴う社会意識の社会学的研究 | 407,000 |
| 41 | | 松倉 耕作 | オーストリア家族法、とくに婚姻法の研究 | 337,000 |
| 42 | | 目崎 茂和 | 中国・日本の風水比較研究 | 337,000 |
| 43 | | 須藤 季夫 | 日本外交における東南アジアとアセアン | 337,000 |
| 44 | | 田中 恭子 | 東南アジア華人の実態研究—ミクロの視点から (3年計画) | 337,000 |
| 45 | | Potter, David | International Politics as a Public Policy Problem | 337,000 |
| 46 | | Muncada, Felipe | Returning Migrant Workers | 337,000 |
| 47 | | *野口 博史 | 北部ベトナム紅河デルタ村落における人口動態と人的資源配分政策 | 407,000 |
| 総合政策学部 12件 | | | | 4,254,000 |
| 48 | 情報通信 | 尾崎 俊治 | ソフトウェアエイジング現象の確率モデルによる定式化に関する研究 | 337,000 |
| 49 | | 張 漢明 | 形式手法による組み込み制御システム的设计手法 | 337,000 |

| No. | 学 科 | 氏 名 | 研 究 課 題 | 配分額 |
|-------------|-------|---------|---|------------|
| 50 | | 蜂 巢 吉 成 | 内容、レイアウト、スタイル、文書間構造に基づいたHTML文書の作成支援 | 337,000 |
| 51 | | 児 玉 靖 司 | システムソフトウェア構成のためのソフトウェアパターンおよびフレームワークの提案 | 337,000 |
| 52 | 数 理 科 | 伏 見 正 則 | 準モンテカルロ法の理論と金融工学への応用 | 337,000 |
| 53 | | 木 村 美 善 | ロバスト回帰の理論とその応用に関する研究 | 337,000 |
| 54 | | 鈴 木 敦 夫 | 緊急車両の最適配置計画の研究 | 337,000 |
| 55 | | *高 見 勲 | 多自由度制御方式による非線形プロセスの制御性向上 | 407,000 |
| 56 | | 佐々木 克巳 | 解釈可能性の論理の研究 | 202,000 |
| 57 | | 佐々木 美裕 | 競合下における協力型ハブ・アンド・スポークネットワークの設計に関する研究 | 337,000 |
| 数理情報学部 10 件 | | | | 3,305,000 |
| 合 計 57 件 | | | | 19,499,000 |

| 氏名 | 金額 | 機器備品 | 用品費 | 消耗品費 | 国外旅費 | 研究旅費 | 通信運搬費 | 福利費 | 印刷製本費 | 保守修繕費 | 委託料 | 賃借料 | 諸会費 | 謝礼費 |
|------------|------------|-----------|-----------|-----------|-----------|-----------|---------|---------|--------|--------|---------|--------|--------|-----------|
| 中矢俊博 | 337,000 | | 246,330 | 90,670 | | | | | | | | | | |
| 上田薫 | 337,000 | | | 337,000 | | | | | | | | | | |
| 宮澤和俊 | 337,000 | | | 214,300 | | | 2,700 | | | | | | | 120,000 |
| 唐澤幸雄 | 337,000 | | 134,400 | 70,600 | | | | | | | | | | 132,000 |
| 小林佳世子 | 407,000 | 215,040 | | 191,960 | | | | | | | | | | |
| 高橋弘司 | 337,000 | | | 38,160 | | 151,940 | 10,530 | | 9,450 | | 81,270 | | | 45,650 |
| 中谷実 | 337,000 | 281,400 | | 55,600 | | | | | | | | | | |
| 高橋広次 | 337,000 | | | 337,000 | | | | | | | | | | |
| 田中実 | 337,000 | | | 337,000 | | | | | | | | | | |
| 伊藤司 | 407,000 | | 67,434 | 339,566 | | | | | | | | | | |
| カバール,オズワルド | 337,000 | | | 337,000 | | | | | | | | | | |
| 深井慈子 | 407,000 | | | 5,430 | 401,570 | | | | | | | | | |
| 小林武 | 337,000 | | | 223,260 | | 113,740 | | | | | | | | |
| リム, ロビン | 337,000 | | | 321,655 | | | 12,240 | | | | | | 3,105 | |
| 松戸武彦 | 407,000 | | | 102,900 | 91,950 | 188,950 | | | | | | | | 23,200 |
| 松倉耕作 | 337,000 | | | 153,760 | | 140,240 | | | | | 43,000 | | | |
| 目崎茂和 | 337,000 | | | 11,470 | 142,500 | 141,000 | | | 17,030 | | | 25,000 | | |
| 須藤季夫 | 337,000 | | | 315,840 | | 21,160 | | | | | | | | |
| 田中恭子 | 337,000 | | | 111,880 | | 225,120 | | | | | | | | |
| ポッター,ディビッド | 337,000 | | | 38,139 | 281,894 | | 16,967 | | | | | | | |
| ムンカダ,フェリペ | 337,000 | | | 81,050 | 255,950 | | | | | | | | | |
| 野口博史 | 407,000 | | | | 119,555 | | | | | | | | | 287,445 |
| 尾崎俊治 | 337,000 | | 221,295 | 112,705 | | | 3,000 | | | | | | | |
| 張漢明 | 337,000 | | | 167,000 | | | | 70,000 | | | | | | 100,000 |
| 蜂巣吉成 | 337,000 | | | 216,210 | | | | | | 20,790 | | | | 100,000 |
| 児玉靖司 | 337,000 | | 136,290 | 109,110 | | 61,600 | | 30,000 | | | | | | |
| 伏見正則 | 337,000 | | | 15,200 | 321,800 | | | | | | | | | |
| 木村美善 | 337,000 | | | 149,147 | | 15,300 | | 62,353 | | | | | 31,000 | 79,200 |
| 鈴木敦夫 | 337,000 | | | 47,390 | 195,760 | 32,160 | 2,290 | | | | | | | 59,400 |
| 高見勲 | 407,000 | | 192,045 | 214,955 | | | | | | | | | | |
| 佐々木克巳 | 202,000 | | | 201,533 | | | 467 | | | | | | | |
| 佐々木美裕 | 337,000 | | 59,115 | 35,377 | 88,000 | 75,900 | | 78,608 | | | | | | |
| 合計 | 19,499,000 | 1,297,703 | 2,480,901 | 8,261,003 | 3,254,128 | 1,840,830 | 268,495 | 240,961 | 33,383 | 29,085 | 124,270 | 25,000 | 34,105 | 1,609,136 |

2. 2002 年度

パツへ研究奨励金 I-A

(特定研究助成) 研究成果報告書

(1) I-A-1 (特定研究助成・特別)

◎ 櫻井 進 人文学部日本文化学科

【研究課題】戦前・戦後ナショナリズムの思想史的研究—連続面と非連続面—

【研究の種類】個人

【研究実績の概要】

現在グローバル化によって国民国家の枠組みが動揺し、国民国家の枠組みを超えた広域的な秩序が模索されている。それは時として「文明の衝突」という形で語られる。本研究では、国境を逸脱しようとする市場主義経済と資本の流れを国境によって遮断しようとする国民国家の枠組みの解体構築が帝國的秩序形成へと向かった 1930 年代の問題を、一つは世界同時的な視点から、もう一つは戦前・戦後の連続面という視点から探求した。

- ・「世界史の哲学」・「大東亜共栄圏論」・京都学派の哲学に関する資料収集・調査を行った。
- ・第一次大戦期以降の西欧におけるヴァレリーなどの文明論の世界史的意義を検討した。
- ・皇国史観の形成とナショナリズムの関係について検討した。
- ・「世界史の哲学」・「大東亜共栄圏論」と同時代の西欧の「西欧への回帰」の言説との対応関係について検討した。
- ・戦前・戦後の社会システムの連続性に関する岡崎哲治らの経済史的研究を思想史的文脈から検討した。
- ・国家総動員体制の社会思想史的意義について検討した。
- ・単一民族文化論の言説的形成の問題を戦前・戦後の政治＝社会的連関から検討した。
- ・日本文化研究の方法論的な課題についての公開セミナーを子安宣邦大阪大学名誉教授を招いて開催した（2002 年 10 月 25 日, 11 月 25 日）。
- ・本研究の一環としてワークショップ「ナショナリズムの現在」を 2003 年 2 月 4 日・5 日にわたって開催した。

基調報告 櫻井進「ナショナリズムの現在」

平野敬和氏（大阪大学大学院）「帝国の政治思想—戦中・戦後の蠟山政道と丸山真男—」

（コメンテーター馬場伸彦氏 [名古屋大学大学院]）

荻部直氏（東京大学助教授）「ネイションの再定義と戦後—南原繁をめぐる—」

（コメンテーター中村春作氏 [広島大学]）

米谷匡史氏（東京外国語大学助教授）「日中戦争期の社会思想—「東亜協同体」論を読む—」

（コメンテーター及川英二郎氏 [東京学芸大学助教授]）

★司会：樋口浩造（愛知県立大学助教授）・櫻井進

【研究成果・公刊計画】

[図書の一部] 『歴史はいかに書かれたか』（共著）、岩波書店、2003 年刊行予定、櫻井 進

◎ 宮澤 元 数理情報学部情報通信学科

【研究課題】分散ファイルシステムにおけるファイルシステム層とストレージ層の連携に関する研究

【研究の種類】個人

【研究実績の概要】

1. 本研究は、分散ファイルシステムを実現する際に、ファイルシステム層とストレージ層の二層に分けて実装し、これら間で適切なインタラクションを行うことによりファイルアクセスの効率化を達成するものである。
2. ストレージ層の全体ないし一部はオペレーティングシステム (OS) カーネル内に実装する必要がある。そこで、本研究ではシステム実装のための基盤として、Linux を利用することとした。Linux はオープンソースで開発されている OS であり、ソースコードが公開されているので今回のようにシステムに手を加えることが比較的容易だからである。
3. Linux カーネル内にシステムを実装するために、以下のマニュアル 2 冊を購入し、これを参考にして Linux カーネルの調査を行った。
 - ・「詳解 LINUX カーネル」(D. P. Bovet and M. Cesati 著, オライリー・ジャパン, 2001 年 7 月)
 - ・「LINUX デバイスドライバ第 2 版」(A. Rubini and J. Corbet 著, オライリー・ジャパン, 2002 年 5 月)
4. 上記と並行して、システム的设计を行った。今回は特にストレージ層の実装に重点を置くこととし、ストレージ層を以下のモジュールから構成することとした。
 - ・ストレージインターフェース部
 - ・ブロック通信部
 - ・論理ブロック管理部

- ・物理ブロック管理部
- 5. 上記の設計に基づき、システムの実装を行った。
- 6. システム完成後の実験に用いるため、パーソナルコンピュータ 6 台を購入し、PC クラスタを構成した。
- 7. ここまでの研究経過をまとめ、中間報告としてアカデミアに発表した。
- 8. 現在、まだシステムの実装を行っている段階だが、今後引き続き研究を行い、結果を雑誌論文等にまとめ発表していく予定である。

【研究成果・公刊計画】

[雑誌の部] 「ファイルシステム情報を利用する分散ストレージシステム」、『アカデミア』数理情報篇，第 3 卷，2003 年 3 月，pp. 47～52，宮澤 元

(2) I-A-2 (特定研究助成・一般)

◎ 齋藤 衛 人文学部人類文化学科

【研究課題】移動と照応関係

【研究の種類】個人

【研究実績の概要】

- (1) フェイズ理論に基づく循環的意味解釈のメカニズムを提示し、不適正移動の分析およびスクランプリングの複合的性質の説明を追求した。この成果の概要は、『英語青年』2000 年 8 月号の特集「フェイズと極小主義理論」の中で、「フェイズ理論と連鎖の循環的解釈」と題する報告論文として発表した。
- (2) スクランプリングの分析を進展させつつ、移動と照応関係に関する体系的な研究を行なった。特に、束縛原理 A、束縛原理 C、適正束縛の条件を詳細に検討し、それぞれについて新たな定式化を提案するに至った。この研究は、“A Derivational Approach to the Interpretation of Scrambling Chains”と題する論文にまとめ、専門誌 *Lingua* (2003 年 4 月号) において発表した。
- (3) 以上のスクランプリング研究の成果を、以前から取り組んでいる主要部移動と意味解釈との関係に関する研究と統合し、日本語の特殊性を規定するパラメータについて仮説を提示した。この仮説は、1980 年代に提案された Kenneth Hale 氏の非階層性仮説を、極小主義理論に基づいて進展させ、派生のメカニズムの中に位置付けたものである。アメリカ北東部言語学会の Hale 氏追悼特別セッション (2002 年 11 月 8 日) において仮説の概要を明らかにし、また、慶應大学言語文化研究所公開セミナー (2003 年 3 月 5 日～3 月 7 日) においてより詳しい内容を発表した。

【研究成果・公刊計画】

[雑誌の部] 「フェイズ理論と連鎖の循環的解釈」、『英語青年』，研究社，第 148 巻第 5 号，2002 年 8 月，pp. 274～278，齋藤 衛

“A Derivational Approach to the Interpretation of Scrambling Chains”，*Lingua*(Elsevier Science B.V.)，Vol. 113 No. 4，2003 年 4 月，pp. 481～518，Mamoru Saito

◎ 青柳 宏 人文学部人類文化学科

【研究課題】機能範疇と比較統語論

【研究の種類】個人

【研究実績の概要】

本年度は、Aoyagi (2002) (文部科学省科研費成果報告書所収) として公刊した日本語の格に関する主張が統語的に日本語と類似する韓国語にも適用可能かどうかを検討した。

そもそも日本語の格助詞が一般に仮定されているように (Tada 1992, Koizumi 1995, Ura 2000 など参照) 抽象格 (abstract Case) が具現化したものではなく、文法の音韻部門 (PF) で付与される形態格 (morphological case) にすぎないとする拙論の根拠であった数々の証拠が韓国語にはあてはまらないことが判明した。

まず、日本語にはつぎの (1) a, b のように主格 (ガ格) 名詞句を取らない天候を表す動詞 (weather verbs) が少数ながら存在することが Kuroda (1988) によって指摘されているが、同種の動詞は韓国語には存在しない。

(1) a. 時雨れてきた。

b. 吹雪いてきた。

また、McGloin (1980) が指摘しているように、日本語の可能助動詞レ・ラレを伴った文にも主格名詞句を必要としないものがある。

(2) a. 私にはそんなに早く走れません。

b. 君にはまだまだ働けるだろう。

しかし、上記に対応する韓国語文はいずれの場合も容認度が低い。

つぎに、Kuroda (1988)に従えば、格助詞の削除(case marker drop)は抽象格によって認可された場合にのみ可能ということになるが、日本語では対格(ヲ格)が動詞に隣接した場合にのみかろうじて可能であって、主格助詞削除は許されないとされる(つまり、主格と対格に非対称性がある)。

(3) a. 太郎が何 \emptyset 買った(か教えて)

b. *何 \emptyset 太郎に届いた(か教えて)

ところが、対応する韓国語では対格のみならず、主格助詞を削除しても日本語に較べるとはるかに容認度は高い。

さらに興味深いことに、受動文において主語化(=主格化)される名詞句の可能性にも両語の間に違いがみられる。

(4) a. 首相は太郎に勲章を与えた。

b. 勲章が(首相によって)太郎に与えられた。

c. 太郎が(首相によって)勲章を与えられた。

「与える」のような3項述語の文からは、日本語では(4)bのように対格名詞句を主語化することも、(4)cのように与格(ニ格)名詞句を主語化することもできるが、韓国語では対格名詞句しか主語化できない。一般に形態格に対しては抽象格と違って格吸収(absorption)が起こらないとされるので、(4)cの存在は日本語の格が形態格である証拠のひとつと考えられるが、逆に韓国語における同例の不在は韓国語の格が形態格というよりも抽象格である可能性を強く示唆している。

以上のような観察に基づいた日韓語の格と受動文に関する論考を現在投稿中である。

◎ 谷口佳津宏 人文学部人類学科

【研究課題】サルトル研究

【研究の種類】個人

◎ 吉田 竹也 人文学部人類文化学科

【研究課題】バリ宗教の民族誌論的研究——「観光地の人類学」研究試論——

【研究の種類】個人

【研究実績の概要】

- ・4月以降およそひと月かけて、これまでにバリ島のとくに観光地周辺で撮影した写真を、スキャナーでコンピュータにとりこみ、整理する作業をおこないながら、手持ちのデータについて検討を加えた。
- ・8月～9月にかけておよそ3週間の日程でインドネシアに行き、資料収集をおこなった。バリ島では2週間にわたってウブドという観光地に滞在し、おもに日本人の開業する現地店舗に関するデータを収集した。
- ・この夏のデータを中心にして、現在ウブドという観光地における日本人のビジネスをひとつのテーマとした論考を執筆中である。なお、この論考は、南山大学人類学研究所の共同研究での発表原稿となるもので、今後研究所関連の研究活動を通じて、議論を練り上げていきたいと考えている。
- ・この「観光地の人類学」を、民族誌論の視点とどのように結びつけ、議論として一体化したものとしていくかについては、まだ十分な見通しを得るに至っていない。ただ、民族誌論という視点についてあらためて人類学の学説史に照らしつつ整理するという作業を進めており、まずはこの段階の議論をひとつの論考にまとめ上げ、そのあとであらためて研究課題にあるようなタイトルに相応しい議論を構築することを考えている。

【研究成果・公刊計画】

[雑誌の部] 「民族誌論覚書—20世紀人類学のパラダイムと民族誌」、『アカデミア』人文・社会科学編、第77号、2003年6月発行予定

「市場としての観光地——バリ島ウブドの事例——(仮題)」、『人類学研究所紀要』(予定)

◎ 石原 美奈子 人文学部人類文化学科

【研究課題】動物と人の共生の論理——エチオピア南西部におけるジャコウネコ飼育に関する研究——

【研究の種類】個人

【研究実績の概要】

・研究経過

2002年8月から9月にかけて1ヶ月間、エチオピア南西部に赴き、オロモ社会の一部のクラン(氏族)の間で

代々受け継がれているジャコウネコ飼育の慣行について調査を行った。帰国後、調査データを論文にまとめ、これは今年中に公刊予定となっている。

・研究成果

筆者は、1992年以来、エチオピア南西部ギベ川流域に住むオロモ社会の社会構成・宗教慣行および歴史に関して調査研究を行ってきた。その過程で、当地社会を構成するクランのなかでもとくに「ネッガーディエ（商人）」と呼ばれる移民クランに注目し、その移住経緯や当地社会に与えた影響について関心をもった。同クランは、18世紀後半以降当地への移住を開始するが、当地オロモ社会にイスラームとそれに付随する様々な慣習・慣行をもちこんだことで知られている。その代表例が、エチオピア南西部を発祥地とするコーヒーヤカート (*Catha edulis*)、あるいは当地に数多く生息するジャコウネコ、の3つの利用方法である。前二者に関しては、今後の課題としているが、ジャコウネコの飼育に関しては、近年さまざまな要因から注目されているため取り組むべき緊急性を要する課題として、今回集中的に調査を行った。

ジャコウネコ飼育に関しては、エチオピアでの歴史は古く、アラビア語の文献で少なくとも11世紀に遡るとされ、その飼育方法もさほど大きく変化していないといわれている。ジャコウネコ飼育が少なくとも9世紀に亘り継続された理由としては、ジャコウネコから採取される麝香が古くから香水の原料として用いられ、アラブ圏・西欧圏の需要の大きさに支えられてきたことがある。だが近年欧米諸国で普及している動物愛護運動はジャコウネコ飼育が「残酷」であるとして非難を展開している。エチオピア政府は、こうした非難を受けてジャコウネコ飼育方法の改善に取り組んでいるが、なかなか実現と普及にいたってはいない。筆者は、ジャコウネコ飼育の継続性を支えた要素として、麝香の「商品」としての流通性のほかに、飼育者の価値観や神話による説明原理などの文化的論理があると捉え、動物愛護運動が展開する「残酷」という倫理的参照点／規準を相対化する試みを展開した。

【研究成果・公刊計画】

〔雑誌の部〕 “Cultural Logic of Civiculture”, *Nilo-Ethiopian Studies*, No.8, 2003年, Minako Ishihara, 公刊予定

◎ 石田 裕久 人文学部心理人間学科

【研究課題】「総合学習」の導入をめぐる諸問題

【研究の種類】個人

【研究実績の概要】

今次の学習指導要領の改訂にともなう「総合的な学習の時間」の創設により、これまでの「教科指導」とはまったく異なるタイプの授業を計画し、実践することが個々の教師に求められることになった。しかしながら、この改訂は、これまでのような教科内容の精選と学習指導の改善に止まるものではなく、その背後には教育行政や学校経営全般にわたる教育の自由化ならびに経済効率追求の流れを見て取ることができる。本研究は、「総合的な学習の時間」登場の経緯とそれを取りまくさまざまな教育改革の現状について考察するとともに、これからの教師の役割について検討しようとしたものである。

「総合的な学習の時間」の導入をめぐる諸問題の検討は、以下の6つの観点から行っている。

- 1 指導要領改訂と総合学習
- 2 総合学習“登場”の経緯
- 3 教科カリキュラムと総合学習
- 5 総合学習と教師の役割
- 6 総合学習と評価の問題

わが国では、これまで指導案の骨格がすでに採用する教科書に応じて定まっていたために、教員自身がゼロから授業計画を立て、それを繰り返し評価することによって洗練させて、自分自身の職務上の財産として蓄えていく、というものは行われてこなかった。しかしながら、総合学習が導入され、学習指導能力についての自己点検が求められるようになるとき、こうした指導を自己評価する活動はきわめて重要となってくるだろう。

総合的な学習のようなタイプのカリキュラムを学校教育の制度として取り入れる場合、本来ならば、国がナショナル・カリキュラム・センターを創設して教員の授業案作成を支援するような仕組みが必要であろう。しかし、現実にはひたすら個々の教員の創意工夫に任せられているわけで、そうした意味でも、「総合的な学習の時間」の導入をきっかけとして、教員個々人の役割と責任について再検討しておくことは緊急の課題となっている。

【研究成果・公刊計画】

〔雑誌の部〕 「『総合的な学習の時間』の登場とその背景」、『アカデミア』人文・社会科学編、第77号、2003年6月発行予定、石田 裕久

〔図書部の部〕 「教科指導と総合的な学習」、梶田正巳編『学校教育の心理学』所収（執筆担当：第Ⅱ部第4章）、名古屋大学出版会、2002年9月、pp.105～116、石田 裕久、共著のため助成を受けた旨の付記なし

◎ 神谷 俊次 人文学部心理人間学科

【研究課題】記憶システムにおける自伝的記憶の位置づけに関する研究

【研究の種類】個人

【研究実績の概要】

- ・自伝的記憶の構造に関する理論的研究についてレビューを行った。
- ・自伝的記憶と意味記憶の違いを探るための2つの実験的検討を行った。
- ・研究成果の一部を第66回日本心理学会にて発表した。

報告題目「自伝的記憶と意味記憶の関係について」発表論文集 p. 728

- ・従来、意味記憶とエピソード記憶は独立したシステムであると主張されてきたが、本研究により、両者の間に強い関連性が認められることが明らかにされた。

【研究成果・公刊計画】

[雑誌の部] 「自伝的記憶と意味記憶の関連性に関する研究」、『アカデミア』自然科学・保健体育編、第11巻、2003年1月、pp. 17～28、神谷 俊次

◎ 津村 俊充 人文学部心理人間学科

【研究課題】ラボラトリ・メソッドによる体験学習の効果性に関する研究

【研究の種類】個人

【研究実績の概要】

本研究の目的は、ラボラトリ・メソッドによる体験学習、とりわけTグループを用いた人間関係トレーニングに関するレビューすると共に、体験学習を用いたプログラムの展開と学習者に及ぼす学習効果についての検討を行うことを目的としている。

1. まず、ラボラトリ・メソッドとして誕生した「Tグループとトレーニング・ラボラトリ」に関する基本的な考え方をレビューしながら、トレーニングを構成する4つの要素について検討を行った。
2. ラボラトリ・メソッドによる体験学習のステップの再検討を行い、Tグループの実践例をもとに、トレーニングの根底にあるラボラトリ・メソッドの本質や目標観を吟味した。
3. 以上、1、2を、『Tグループを中心としたトレーニング・ラボラトリ』と題して『ヒューマニスティック・グループ・アプローチ、伊藤義美編、2002』に掲載した。ただし、著書の性質上、2002年度パッへ研究奨励金 I-A-2 助成の記載ができていないが、お許しいただきたい。
4. ラボラトリ・メソッドによる体験学習を用いた教育プログラム実践において、社会的スキル尺度 KiSS-18 を用いて効果性を検討した。その結果、全体的に社会的スキルの向上傾向が見られた。また、特に、社会的スキルが低い群ほど、その傾向が強いということが示された。これらは、日本社会心理学会第43回大会にて『ラボラトリ・メソッドによる体験学習の社会的スキル向上に及ぼす効果』と題して、研究発表を行い、発表論文集に掲載された。これも、紙面の都合、2002年度パッへ研究奨励金 I-A-2 助成の記載ができていない。

【研究成果・公刊計画】

[雑誌の部] 「ラボラトリ・メソッドによる体験学習の社会的スキル向上に及ぼす効果」、日本社会心理学会第43回大会発表論文集、2002年11月、pp. 456～457、単独発表

[図書の部] 「ヒューマニスティック・グループ・アプローチ 第6章 Tグループを中心としたトレーニング・ラボラトリー」、ナカニシヤ出版、2002年10月10日、pp. 79～98、伊藤 義美編、津村 俊充分担執筆

◎ 加藤 隆雄 人文学部心理人間学科

【研究課題】心理学への関心の社会的分析

【研究の種類】個人

【研究実績の概要】

- ・上記課題に関心をもっている研究者・大学院生と4～5回にわたる研究会等で、テーマを明確にし、研究方針を定めた。
- ・「心理(学)主義」といくつかの文献で表現されている現象について、文献研究を進めた。その結果、この現象がかなり複合的なものであり、いくつかの場(学校・文化市場・企業社会など)で、その場固有の native な力と補強したり相殺したり変形されたりしていることが明らかになった。
- ・しかし、いずれにせよそうした現象を実証的に研究しなければならないため、調査の計画を立てたが、準備が不十分であると判断されたため、既存の調査データを再分析することを進めている。

【研究成果・公刊計画】

[雑誌の部] 「内面性指向と心理学的関心——大学生の調査から——」、『アカデミア』、第78号(予定)、加藤

隆雄・紅林 伸幸

「内面性の政治学的批判にむけて」、教育社会学研究（投稿予定）、加藤 隆雄・越智 康詞
「内面性の政治学と社会化論」、『アカデミア』、（予定）

◎ 中村 和彦 人文学部心理人間学科

【研究課題】体験学習方式による授業が学生の人間的成長に及ぼす効果について

【研究の種類】個人

【研究実績の概要】

- ・体験学習方式による授業の効果について
講義方式（心理学の授業）と比較したデータの分析・考察・論文作成
→『アカデミア』人文・社会科学編、第76号に投稿した。
- ・体験学習方式による授業の効果、統制群を用いた比較検討を行うためのデータ収集
体験学習群および統制群のデータ収集のため、調査項目の検討、調査の実施（統制群は郵送調査）、収集されたデータの入力を実施した。（現在、分析にはまだ入っていない）
- ・図書館利用調査実施のためのデータ入力
大学図書館からの依頼による図書館紀要への論文執筆のため、利用者調査を行ったが、そのための莫大なデータの入力費用を今回の研究助成より一部捻出した。
→『南山大学図書館紀要』第8号に掲載。

【研究成果・公刊計画】

〔雑誌の部〕 「体験学習を用いた人間関係論が学習者の対人関係能力に及ぼす効果について—社会的スキル・対人不安などへの効果および学習スタイルと効果との関連—」、『アカデミア』人文・社会科学編、第76号、2003年1月、中村 和彦
「大学図書館の利用に影響する要因は何か？—利用者特性と状況が図書館利用や情報探索行動に及ぼす影響—」、『南山大学図書館紀要』、第8号、2003年5月、中村 和彦

◎ 細谷 博 人文学部日本文化学科

【研究課題】近代文学に於ける小説・批評論の研究

【研究の種類】個人

【研究実績の概要】

日本近代の小説と評論との相関的な読解研究を行うという研究目的に向けて、下記のような研究経過を経て研究結果を得た。

○研究経過

1. 従来の作品論や批評論を検討し直し、それらとの相関関係に於いて追究されるべき作品の特質とその意味づけについて、さらに具体的に綿密な読解作業と分析を重ね、考察した。
すぐれた研究や批評にあらわれた個々のテキストの〈読み〉の実体とその特質について、具体的かつ根本的な分析と考察を進めた。
2. 批評の対象とされる作品や作家に関する資料・参考文献の収集を行った。
3. 資料・参考文献の内容とそれにたいするコメントをコンピュータに入力してデータベースの作成を継続し、さらにその活用方法の検討を行った。
4. コンピュータを使用したデータ蓄積、インターネット等による資料収集により、より集約的な小説論・批評論の分析検討を試みた。
5. 小説・批評本文の更なる精読と解釈、分析と批評を継続して行った。
6. それらの読解と分析検討の継続の中から近代文学論のさらなる可能性をさぐり、あらたな近代文学理解を提示すべく、具体的な作品分析を試みることによって、各種の論考の執筆を継続的に行った。

○研究結果

日本近代の小説と評論との相関的な読解研究を行うという研究目的のために、下記のような研究経過を経て研究結果を得た。

【研究成果・公刊計画】

〔雑誌の部〕 「『女生徒』の自立性—『有明淑の日記』との関係で—」、『アカデミア』文学・語学編、第73号、2003年1月、pp. 368~396、細谷 博

◎ 丸山 徹 人文学部日本文学学科

【研究課題】「大航海時代の語学書」としてのキリシタン文献——ブラジル、インド現地語諸文献との対比を中心にして

【研究の種類】個人

【研究実績の概要】

「キリシタン文献」の研究に次の二つの観点を研究に導入することは不可欠である。

1. (16・17世紀の) ラテン語・ポルトガル語語学書成立の背景
2. 同時代のアフリカ・ブラジル・インド、そして日本における(ポルトガル語で書かれた)現地語文法書・辞書成立の背景

本年度は上記1, 2それぞれに対応する形で以下の二つのことを行なった。

1. (昨年度に引き続き) 16世紀ポルトガル語文法書の翻刻・索引作成・印刷とその「作成報告」執筆(⇒『アカデミア』論文)
2. 17世紀書写コンカニ語・ポルトガル語辞書翻刻の継続

そうした中で何年後かの成果発表を目指し、下記の仕事も少しずつ続けた。

- ①17世紀書写コンカニ語・ポルトガル語辞書の翻刻継続および同時期の諸写本との比較検討
- ②インド・コンカニ語のキリシタン要理と日本のドチリナとの対照研究
- ③ブラジル・トゥピ語諸文献との対照研究

【研究成果・公刊計画】

〔雑誌の部〕「16世紀ポルトガル語文法書文脈付索引作成報告(続)」、『アカデミア』文学・語学編、第73号、2003年1月、丸山 徹

◎ 美濃部 重克 人文学部日本文学学科

【研究の種類】個人

【研究実績の概要】

●泉鏡花論 今年度の短期の目標

泉鏡花の文学における主題の中心は「母」なるものと「私」の関係そして喪失した至福の情景の再現的探求とであると考えている。それでその主題が鮮やかに刻印されている作品のうちで極めて複雑な内容であり、かつ泉鏡花の最大の長編である『由縁の女』そして長編『無憂樹』を取り上げて論文を書いた。そのためパッへ研究奨励金を利用して慶応大学、金沢市、松任市そして神戸市の摩耶山で典籍調査と現地調査を行なった。

その成果は三本の論文になって刊行される予定である。

- ①「泉鏡花『由縁の女』－〈着せる女〉〈操りの糸〉」(福田晃監修『伝承文化の展望－日本の民俗・古典・芸能』三弥井書店刊 2003年1月20日刊行)
- ②「隠喩としての「虫」－泉鏡花『由縁の女』川端康成『山の音』安部公房『砂の女』の「第二章」(『アカデミア』人文・社会科学編第76号 2003年1月刊行)
- ③「いざべ伊勢路にかゝらむ－鏡花文学の「伊勢」－」(神宮司彦刊『瑞垣』号未定 2003年の号に収載予定原稿提出済み)

●『女訓抄』論 中期の目標

天理本『女訓抄』および寛永刊本系統の徳国文庫蔵『女訓抄』の本文の翻刻および解説書(美濃部も編集者のひとりである『伝承文学資料集成』の一冊とする予定)の原稿作成のための研究を行なった。パッへ研究奨励金を利用して国会図書館、国文学研究資料館で典籍と資料調査・蒐集を行なった。

現在、仕事を進めていて2003年度中に出版することができると確信している。

●『平家物語』論 長期の目標

覚一本『平家物語』を底本に『平家物語』を始めから終わりまで各句を迎るかたちで『平家物語』論を行なおうとする研究書の完成を目指している。それと平行しながら各論的な問題を立てた論文また『平家公達草子』の注釈書を書く予定だが、今年は執筆していない。

- ①『平家物語』の抒情表現の遠近法－「二代后」多子の悲しみ(『南山大学日本文学学科論集』第3号 2003年3月刊)

●御伽草子論

- ①「御伽草子の呼称と範囲」(『中世王朝物語・御伽草子事典』の「御伽草子の世界」勉誠社 2002年5月刊)

【研究成果・公刊計画】

〔雑誌の部〕「隠喩としての「虫」－泉鏡花『由縁の女』川端康成『山の音』安部公房『砂の女』のうちの(二)『由縁の女』論、(『アカデミア』人文・社会科学編 第76号、2003年1月、共著 長谷川 雅雄、クネヒト・ペトロ、辻本 裕成、その箇所は美濃部 重克

「いざべ伊勢路にかゝらむ－鏡花文学の「伊勢」－」、『瑞垣』、号数未定、2003年内の号に載る予定、美濃部 重克

『平家物語』の抒情表現の遠近法—「二代后」多子の悲しみ—, 『南山大学日本文化学科論集』, 第3号, 2003年3月刊行, 美濃部 重克
[図書の一部] 『伝承文化の展望—日本の民俗・古典・芸能—』「泉鏡花『由縁の女』—〈着せる女〉〈操りの糸〉—」, 三弥井書店, 2003年1月20日刊, pp. 511~522, 美濃部 重克
『中世王朝物語・御伽草子事典』の「御伽草子の呼称と範囲」, 勉誠社, 2002年5月刊, pp. 622~633, 美濃部 重克

◎ 鳥巢 義文 人文学部キリスト教学科

【研究課題】キリスト教的神理解の研究

【研究の種類】個人

【研究実績の概要】

〈研究経過〉

1. 前年度に開始した研究, キリスト教の伝統的神理解を現代的視座から捉え直す試みを, 次の二つの仕方で深化させた。
2. まず, 伝統的な神理解の中でも注目すべき事例として, 2世紀のリヨンのエイレナイオスの神学をとりまとめる作業をした。この教父の神理解に見出される救済史的三位一体の神理解は, 一部, 解釈をすることによって現代の神学にも応用できると考える。
3. つぎに, 私論の論拠を補強するために, 新約聖書に表われる神理解を聖霊の理解の分析という仕方でまとめる作業をした。キリスト論に隠れがちな聖霊論のバランスよい展開への一寄与である。

〈研究結果〉

次の二点を公刊した。

1. 『エイレナイオスの救済史神学』(新世社, 2002年12月) 304p. +3p.
2. 「聖霊の経験—聖書の描く神の躍動性について」『南山神学』第26号(2002年12月)

【研究成果・公刊計画】

[雑誌の一部] 「聖霊の経験—聖書の描く神の躍動性について」, 『南山神学』, 第26号, 2002年12月, 鳥巢 義文

[図書の一部] 『エイレナイオスの救済史神学』, 新世社, 2002年12月, 304p. +3p, 鳥巢 義文

◎ 奥山 倫明 人文学部キリスト教学科

【研究課題】エリアーデ宗教学形成前史に関する基礎的研究—戦間期ルーマニアでの言論活動を中心に—

【研究の種類】個人

【研究実績の概要】

1. エリアーデ研究の一つの成果として, エリアーデを編集主幹とする没後出版である, マクミラン社(ニューヨーク)から刊行の *The Encyclopedia of Religion*, 16 volumes (1987)のテーマ別抜粋版 *Religion, History, and Culture: Selections from The Encyclopedia of Religion*のうち, Lawrence E. Sullivanの編集による *Hidden Truths: Magic, Alchemy, and the Occult* (Macmillan, 1987, 1989)を共訳の上, 出版した(エリアーデ主編『エリアーデ・オカルト事典』鶴岡賀雄・島田裕巳・奥山倫明訳, 法蔵館, 2002年)。同書中, 私が翻訳を担当した項目には, エリアーデが1930年代のルーマニア時代から関心を抱いていた主題についての, 彼自身による論文「錬金術とは何か」がある。
2. 2002年10月には文献収集等を目的としてルーマニア・ブカレストを再訪し, ルーマニア・アカデミー哲学心理学研究所において, 東京大学教授鶴岡賀雄氏との共同セミナーを開催した。そこで発表した論文“A History of Religion of the Other: Eliade’s Dialogical Methodology”については, ブカレスト大学歴史学科 Eugen Ciurtin氏を中心とするルーマニア宗教学会を通じて, 同学会機関誌 *Archævs: Etudes d’Histoire des Religions / Studies in the History of Religions*, ならびにスロヴァキア共和国, 国家—教会関係研究所年鑑に収録されることになっている。
3. 現在, 上記のルーマニア滞在で収集した文献資料の読解, 内容の検討に取り組んでいる。

【研究成果・公刊計画】

[雑誌の一部] “A History of Religions of the Other: Eliade’s Dialogical Methodology”, *The Yearbook of the Institute for State-Church Relations, Slovak Republic*, No. 5, 2003, Michiaki Okuyama

◎ 藤本 博 外国語学部英米学科

【研究課題】 ヴェトナム戦争をめぐる国際関係の歴史的研究

【研究の種類】 個人

【研究実績の概要】

[研究経過]

- (1) ヴェトナム戦争をめぐる国際関係の歴史的研究の一環として、二つの研究を進めた。
 - ① ヴェトナム戦争後におけるアメリカ外交の遺産としての「ヴェトナム戦争の記憶」の変遷と現状をヴェトナム戦争後におけるアメリカの対外政策の推移と関連させて考察した。
 - ② アメリカのヴェトナム戦争遂行にあたっての同盟国の役割、わけても日米同盟（日米安保体制）下での日本の役割に注目して研究を進めた。とくに、2002年度においては、ヴェトナム戦争期の日米安保体制下における在日米軍の役割に関して研究を行った。
- (2) 上記二つの研究課題に関連して、二次文献の収集に努めるとともに、2003年1月17日～25日の期間、米国立公文書館第2号館 [メリーランド州カレッジ・パーク] 及びジョージワシントン大学 [ワシントン, D.C.]にて史料調査・史料収集を行った。
- (3) 研究成果の一部を下記の学会ならびにシンポジウムで報告した。
 - ・①について——「アメリカ合衆国におけるヴェトナム戦争の記憶」(2002年度歴史学研究会大会・特設部会「戦争の記憶」, 2002年6月2日, 立教大学)。
 - ・②について——「ヴェトナム戦争と日米関係—在日米軍・米軍基地の役割を中心に」(シンポジウム「日米安保体制の中のアメリカ軍基地の役割」, 南山大学アメリカ研究センター主催, 2002年11月16日, 南山大学)。

[研究結果]

- ・①について——ヴェトナム戦争の遺産に関連して、ヴェトナム戦争後におけるアメリカ政府指導者ならびに市民レベルに双方における「ヴェトナム戦争の記憶」の変遷に着眼して考察した結果、(i)その記憶の諸相がヴェトナム戦争後におけるアメリカの対外関係（わけても対外的軍事介入姿勢）に一定の影響を与えたこと、(ii)ヴェトナム戦争中に提示されたヴェトナム民衆（「他者」）の戦争犠牲に対する着眼に関して断絶と継承の両面があること、の二点を明らかにした。
- ・②について——アメリカ政府や米軍の意図を中心にヴェトナム戦争の拡大を契機に日米安保体制ならびに在日米軍・米軍基地がどのように変容したかに注目した。関連一次史料・二次文献を通して、ヴェトナム戦争拡大期の1960年代後半において日米安保体制と在日米軍・米軍基地はアジア全体の中で位置づけられるようになり、その後における日米安保体制ならびに沖縄・日本本土の在日米軍・米軍・米軍基地の方向を規定していった点が明らかになった。また、今日に至る日米安保体制の変容・変質を理解する歴史的視座を提示した。

【研究成果・公刊計画】

【雑誌の部】 「アメリカ合衆国におけるヴェトナム戦争の記憶」, 『歴史学研究』, 第768号, 2002年10月, pp. 188～195, 藤本 博

【図書の部】 『世紀転換期の国際政治史』, ミネルヴァ書房, 2003年4月刊行, 福田 茂夫, 佐藤 信一, 堀 一郎編著, 第4章「ベトナム戦争後のアメリカ外交と『ベトナムの記憶』」を執筆

『アメリカの戦争と在日米軍』, 社会評論社, 2003年5月刊行, 島川 雅史, 藤本 博編著, 第3章「ヴェトナム戦争と在日米軍・米軍基地」を執筆

◎ 松永 隆 外国語学部英米学科

【研究課題】 Socio-cultural theory and language learning: ZPD and Interaction in classrooms

【研究の種類】 個人

【研究実績の概要】

What cognitive processes are involved in the development of the ZPD, which guides learners to acquisition of language or knowledge in general? The present study focused on scaffolding observed in cooperative interactions in the very specific context of a computer lab instructional setting. Participants were first-year English majors taking a writing course in the fall semester. They had a web site construction project as a major task to be completed. The researcher thought that knowledge and skills needed for creating web pages would be very useful for these learners in the near future. Since the Internet is undeniably an extremely important and useful medium, setting such a task for our learners is realistic.

The final objective was construction of a web site on topic areas selected by each group. This objective was carefully analyzed to create enabling objectives, which in turn determined sub-tasks and activities. These smaller tasks and activities were then sequenced to reflect difficulty levels and gradual development of skills and knowledge for web page designing. The research drew on principles behind cooperative learning,

content-based instruction, and task-based language teaching, and successfully demonstrated that this approach would be very effective for teaching.

The project, from which the data came for this research, had three major phases: a series of small tasks for instructions on web page construction, tasks for formative evaluation, and group-based construction of web pages. The data was taken from interactions recorded on disks during task performances in pairs at the end of the first phase. MD recorders, which were placed in front of two selected pairs of students working together, recorded the pair work as well as the teacher instructions. The interactions were transcribed and analyzed from the perspective of socio-cultural theory of learning. The transcriptions revealed the cognitive processes involved in the development of the ZPD mediated by scaffolding through cooperative interactions. The present research collected and examined extensive data on the teacher instructions as well as pair work in a very specific context, and this approach enabled the researcher to make accurate and reliable interpretations of the recorded data. If we had used several MD recorders, we could have collected a larger variety of student interactions to make stronger claims and generalizations. It would also be useful to collect data from student pairs working on tasks independently of the teacher and examine the differences in the way the ZPD might be developed.

【研究成果・公刊計画】

[雑誌の部] “ZPD Observed Through Interactions In Classrooms”, 『アカデミア』文学・語学編, 第74号, 2003年6月刊行予定

◎ 村杉 恵子 外国語学部英米学科

【研究課題】 統語理論と文法獲得

【研究の種類】 個人

【研究実績の概要】

1) 言語理論研究

日本語と英語を対象言語として、関係節や複合名詞句に関する比較統語的研究を進め、それを含む統語現象として、削除現象についての本を執筆している。また複合述語文の分析として、特に使役に関する重要な先行研究を読みながら、2)の文法獲得研究を行う礎を準備した。

2) 心理言語学研究

実証研究としては5歳の子ども1名(過去4年にわたり実証研究対象としている被験者)から複合述語の獲得データを中心に観察的研究を続け、それを文字化した。

理論的研究としては、使役の発達について、現在論文を纏めており、2003年5月にオランダはマックスプランク心理言語学研究所で発表の予定である。

実証と理論をあわせる研究として、移動に関する研究を纏めた。台湾で2002年に行われたGLOW(理論言語学会)での研究発表を論文として纏めた。

【研究成果・公刊計画】

[雑誌の部] “On the Acquisition of Scrambling in Japanese”, *Language and Linguistics*, 村杉 恵子, 川村 知子

◎ 鈴木 達也 外国語学部英米学科

【研究課題】 ミニマリスト・プログラムにおける英語動名詞の構造研究

【研究の種類】 個人

【研究実績の概要】

本研究は、英語動名詞の構造を生成文法のミニマリスト・プログラムによって分析するプロジェクトの一部である。英語動名詞の構文はいくつかのグループに分けることができるが、そのうち意味上の主語を対格で標示するACC-INGに焦点を当て、なぜACC-INGには例外的受け身構文が存在しないのかという点について考察した。この問題については、拙論“Exceptional Passive and the Structure of ACC-ING”(『アカデミア』文学・語学編70号, pp. 157-175, 南山大学, 2001年)の中で行なった準備的研究の中で既に、格理論、空範疇の原理(ECP)など様々な角度から研究が行われてきていることを紹介し、同時にそれらの分析の解説及び問題点の指摘を行っている。今回の研究では、Basilico(2003)“The Topic of Small Clauses” *Linguistic Inquiry* 34: 1-35による知覚動詞構文の分析を視野に入れ、小節(Small Clause)の構造に基づくACC-INGの例外的受け身構文の分析を行なった。

研究は、当初フェイズ理論の観点からの分析を予定し準備を進めていたが、本研究に深く関わると思われる

Basilico (2003)の論文を入手したことによって急遽計画を変更し、小節 (Small Clause) の構造に基づく ACC-ING の例外的受け身構文の分析を行なうこととした。

event 解釈と小節構造との対応関係、また知覚動詞構文と動名詞構文との関係など考慮すべき問題は山積しているが、研究を継続し、英語動名詞の文法の理解を更に深めていく所存である。

【研究成果・公刊計画】

[雑誌の部] “Exceptional Passive and the Structure of ACC-ING”, 『アカデミア』文学・語学編, 第70号, 2001年6月, pp.157~175, Tatsuya Suzuki

“PVACC-ING and ACC-ING: A Small Clause-Based Approach to the Lack of Exceptional Passive in English ACC-ING”, 『アカデミア』文学・語学編, 第74号, 2003年6月刊行予定, Tatsuya Suzuki

◎ 木下 登 外国語学部スペイン・ラテンアメリカ学科

【研究課題】ハビエル・スピリの形而上学と日本

【研究の種類】個人

【研究実績の概要】

- ・日本におけるスペイン思想の導入には、今日まで三段階あったことを資料で跡付けた。第一の段階は、キリスト教の伝来とともに始まり、それは16世紀のことであった。第二、三の段階は、それぞれウナムーノ、オルテガを中心人物としたものであった。オルテガは彼の「生の哲学」を軸として紹介され、広範な邦訳も行われた。
- ・上のような、日本とスペイン思想の長い歴史があつて、今日、スピリ思想の日本における紹介が可能となりつつある。論文の第二部（後半）においては、現在まで実現している日本におけるスピリ紹介を資料によって跡付けている。
- ・研究結果としては、日本における西洋哲学研究を基盤として、ハビエル・スピリの形而上学研究と紹介が本格的に動き出した現状と、展望を明らかにした。

【研究成果・公刊計画】

[雑誌の部] “Xavier Zubiri y Japón”, *Anthropos*(Ed. Anthropos, Barcelona), 201, 2003, pp.220~224, Noboru Kinoshita

◎ 横田 忍 外国語学部ドイツ学科

【研究課題】水の精の文学

【研究の種類】個人

【研究実績の概要】

- 1) 数年来の「水の精の文学」研究の一部として、本年度は19世紀末の民謡集『ドイツの歌の宝』第二番目のいわゆる「ラインの花嫁」と呼ばれるバラード6編を比較研究した。
- 2) 花嫁が橋から落ちてライン川で溺れ死ぬことが歌われるが、水の精によるもの、無関係なものなど、さまざまなヴァージョンがある。バラードの内容や伝承分布などを検討し、そもそも水の精の文学といえるのかどうか、なぜ水の精の文学といわれるのかを検討した。
- 3) 「運命の予兆・結婚式の延期願いとその拒絶・ライン渡河・橋からの落下・水死」という共通モチーフが、口から口へと伝承されるうちに、ゲルマン以来のドイツの民間信仰である「死者の川としてのライン川」とか「溺死は水の精によるもの」といった観念と結びつき、水の精と無関係な若い女性の水死事故も、いつの間にか「水の精の嫁になった」と思われ、歌い継がれてきたのだと考えられる。

【研究成果・公刊計画】

[雑誌の部] 「水の精の文学—いわゆる〈ラインの花嫁バラード〉について—」, 『アカデミア』文学・語学編, 第73号, 2003年1月, pp.183~202

◎ 鈴木 宗徳 外国語学部ドイツ学科

【研究課題】社会学理論におけるグローバル化の問題

【研究の種類】個人

【研究実績の概要】

グローバル化の進展とともに、国民国家を枠組みとした旧来の社会学は再検討を余儀なくされている。社会学

がおこなってきた先進産業社会の分析は、二十世紀が達成した福祉国家やケインズ主義的介入国家を自明のモデルとしてきたが、グローバル化の進展は、こうした国民国家レベルの秩序の有効性に疑問を付すものである。先進産業社会のさまざまな病理現象を告発してきた社会学は、現在、グローバル化の流れにどのような態度をとるべきか、決断を迫られている。本研究は、現代を代表する社会学理論の提唱者であるとともに、時局的な発言でも注目を集める、アンソニー・ギデンズとユルゲン・ハーバーマスのふたりに着目し、彼らの理論とグローバル化という現実との対決について考察をおこなう。本年度はそのうち、ギデンズにかんする研究成果を公表した。

ギデンズは、イギリス労働党ブレア政権のブレインとして「第三の道」なる理念を提唱している。その立場は、グローバル化とそれにとまなう競争至上主義・新自由主義（サッチャリズム）の肯定でもなければ、高福祉高負担の社会民主主義（オールド・レイバー）の立場とも異なる、という主張である。その核心は、「機会の平等」すなわち教育（および再教育）の充実によって、「リスクを積極的に引き受ける」人間の育成することにある。しかしこの政策目標は、彼の理論家としての主張である「再帰的近代化 reflexive modernization」と響振する関係にある。すなわち、失業や離婚などの原因について、会社や国家など外部の審級に責任を負わせるのではなく、個人の責任で reflexive に処理しなければならない時代が到来したとの主張である。ここには、新自由主義の主張するむきだしの自己責任原理とは異なる、あらたな自己責任の思想が隠されているのである。グローバル化時代にあっては、社会学理論がおこなう分析が、現実にたいする態度決定を、すなわちある種のイデオロギー性をまもっていることに注目しなければならない。

【研究成果・公刊計画】

〔雑誌の部〕 『『第三の道』とギデンズ社会学』、『唯物論研究年誌』、第7号、2002年10月、pp.260～267、鈴木 宗徳

◎ 松戸 庸子 外国語学部アジア学科

【研究課題】 グローバル化時代の中国家族変動の定性分析

【研究の種類】 個人

【研究実績の概要】

研究の中核は、1998年に中国の5つの地点（上海市、成都市、青浦県、太倉市郊外、四川省宜賓県）で実施したアンケート調査（2500サンプル）に並行して実施したインタビュー調査データの整理・翻訳作業と分析であった。

〈研究経過〉

- ・今回は、自由面接法によって得られたインタビュー記録（中国側の研究共同者である、中国社会科学院社会学研究所などの研究者が代行して録音したもので、ほとんどは中国側によってテープ起こし作業はなされていた）の翻訳に従事した。中国側の理解も得られたので、今回の対象となった40世帯ぶんのテープ起こし作業のための謝金は、当初の予算の半額程度に押さえることができ、残りは図書購入費などに転用することができた。
- ・翻訳作業の大半は研究申請者が実施したが、一部はアルバイトとして、本学の中国人留学生の協力も得た。
- ・今回の研究は、規模の大きな研究プロジェクトの一部に位置づけられ、年度末（2003年3月）には調査地点の再訪も実施したので、翻訳作業の中で発覚した疑問点の確認や、データ解釈に関して、中国側の共同研究者との検討の機会を持つことができた。

〈研究結果〉

- ・今回の翻訳対象世帯は都市家族のものであり、高齢者扶養、社会移動、家族構造、家族内権力関係、住宅状況、耐久消費財の所有状況等に関する統計データの分析の精度を上げる目的で有意抽出された40世帯の聞き取り調査結果であり、インテンシブな方法により、統計データから知ることのできない情報や、統計データの解釈に資する点が多かった。
- ・今回の研究プロジェクトの柱となった視角は家族戦略論であったが、今回の翻訳対象となった都市家族からよりも、むしろ、2003年3月に再訪した、2つの農村部での聞き取りからより有益な情報を得ることができた。
- ・聞き取りデータの資料的価値が大きいことから、邦訳そのものの公刊を検討していたが、アンケート調査結果の分析した論文と一体化させた方法での出版（共同研究者は総勢で12名）に向けて作業が進行中であるために、本研究の成果（論文や研究ノートなど）の発表の具体的な形についても、目下、検討中である。

◎ 森山 幹弘 外国語学部アジア学科

【研究課題】 翻訳と文化の変容：19世紀のインドネシア、スダ語文化において

【研究の種類】 個人

【研究実績の概要】

本研究の目的は、インドネシアにおいて様々な言語の翻訳がどのような影響をインドネシアの文化に与えたか

ということを明らかにしようとするものであった。その研究対象は対象言語と時代など非常に広域にわたるものであるが、西ジャワのスンダ語の言語文化に絞ってその調査を行なった。時代的にはオランダの植民地化が本格的に始まる19世紀を扱った。19世紀という時代がインドネシアの歴史と文化において大きな変化が起った時代であることを、翻訳されて印刷された出版物にも見る事ができた。以下に箇条書きとして本研究の初年度の成果を述べる。

1. ヨーロッパの物語、農耕の知識、近代の医学、法などの書物がスンダ語に翻訳された。
2. 翻訳・出版は教科書の印刷が蘭領東インドで行われるようになる19世紀の半ば頃からであった。20世紀初頭までの半世紀の間におよそ250点の書物が翻訳され、出版された。
3. 翻訳・出版の目的は、文明が遅れたものと考えていた「原住民」の教育と啓蒙の為であり、ひいては植民地経営の効率化を目的としたものであった。
4. 上の事業を行なったのは、植民地政庁であったが、時とともに民間の出版社が商業目的で行なうようになった。
5. 翻訳に相応しいものを選択したのは、スンダの文化に詳しいオランダ人や植民地政庁の役人達であった。
6. 一方、キリスト教（プロテスタント）の布教のために行われた翻訳もあった。それらはオランダ聖書教会と宣教師教会がその事業を行なった。
7. 翻訳された書物は高価であったが、教科書として配付されたものもあつたほか、学校で貸しだされるものもあつた。プロテスタント的な内容の書物は宣教師がそれを管理していたようである。
8. 翻訳が既存のスンダ文学に与えた影響は大きかった。まずは、視覚的なもの。それまで、手書きであった書物が印刷されることによって人々の文字に対する意識を変容させたと考えられる。
9. 文体については、声の文化で卓越していた韻文から、翻訳において広く用いられた散文へと次第にシフトしていった。
10. 声に出して読まれたきた文学が黙読へと次第に変化していったようだ。

本年度に計画していたオランダでの調査は諸事情から断念せざるを得なかった。論文は英語で執筆し編集が終了した。論文集としてフランスの研究機関から出版が準備されている。来年には同じ論文集がインドネシア語へ翻訳され出版される予定である。

【研究成果・公刊計画】

〔雑誌の部〕 「スンダ語の本の創出」、『南山大学図書館紀要』, 第7号, 2001年, pp. 47~56, 森山 幹弘

〔図書の部〕 “The Birth of the Modern Reader: Sundanese Translations of European Stories in the Nineteenth Century”, 2003 (予定), 森山 幹弘 (共著)

“A New Spirit: Sundanese Publishing and the Changing Configuration of Writing in Nineteenth-century West Java”, 発表年月未定, 約200ページ, 森山 幹弘

◎ 宮沢 千尋 外国語学部アジア学科

【研究課題】 アジアにおける「市場 (market)」の固有論理に関する学際的研究

【研究の種類】 個人

【研究実績の概要】

①ベトナム社会主義共和国で追求されている社会主義「市場」経済体制が、人口の7割以上を占める村落部で市場的利益追求と、社会主義的平等を、どのように両立させようと努力しているかについて調査した。

②実地調査は2002年4月25日~5月15日と同年8月17日~9月16日の2回に分けて行った。

③その結果以下のことがわかった。

—調査地であるバクニン省ヴィエムサー村では、農業合作社が、農地を分配せずに公共地として一部保留し、能力・資本・意欲に富んだ農民が入札することにより、この農地の耕作権を得る。合作社は、これらの入札代金を基に、インフラ建設や一定の社会保障を実行している。

—この制度はヴィエムサーが県の指導を受けて1990年から始めたものだが、政府や農学者によって、「時代遅れ」とされるようになった2002年現在でも、むらびとは合作社にこの制度の維持を託している。

④こうした制度の維持には伝統的村落結合と文化資本の寄与がある。

【研究成果・公刊計画】

〔雑誌の部〕 「ベトナム北部・紅河デルタ村落における村落運営とリーダー選出」、『南方文化』, 第20輯, 2002年11月, pp. 21~42, 宮沢 千尋

◎ 中矢 俊博 経済学部経済学科

【研究課題】ケインズの文化・芸術活動について

【研究の種類】個人

【研究実績の概要】

1. ケインズの文化・芸術活動に関する資料の収集をおこなった。
2. それらの資料をコンピュータに入力し、各項目ごとに分類・整理した。
3. それらの資料を基に、「ジョン・メイナード・ケインズと文化・芸術活動」という論稿の全体像を構築するとともに、一部分については執筆を開始した。

【研究成果・公刊計画】

【雑誌の部】 「ジョン・メイナード・ケインズと文化・芸術活動」、『南山経済研究』, 第17巻第1号(2002年6月)から掲載を開始し, 18巻第1号(2003年6月)以降にその続きを掲載する予定。

【図書の部】 2年ほどで全体の執筆を完了したら, 図書として出版する予定(題目や出版社は未定)。

◎ 上田 薫 経済学部経済学科

【研究課題】現代産業組織論の視点から見た過剰生産能力論争の歴史的意義

【研究の種類】個人

【研究実績の概要】

研究経過:

- ・2000年度に行った『独占的競争の理論』出版以降の関連文献の収集を継続した。特に前回のデムゼッツの所論に関する論争に関わる重要な文献として1961年のアーキバルトによる論文があり, これを出発点として関連する文献を収集した。
- ・この途中で, アーキバルトの議論の背景にカール・ポパーに触発されたLSEの実証主義経済学のグループがあることを知り, 独占的競争理論の歴史的な位置付けを考える上で大変に興味を覚えた。過剰生産能力論争自体が独占的競争理論が定義する均衡の妥当性や解釈をめぐる論争であり, その適切な理解のためにも経済学方法論と関連する部分を見捨てることは出来ないのではないかと考えるようになった。
- ・そこで, やや迂回的なアプローチであるが, アーキバルトの議論に先立ち1940年代にスティグラー, フリードマンらいわゆるシカゴ学派とチェンバリンの間で交わされた方法論に関わる論争をまず取り上げ, これがアーキバルトの議論を経由して独占的競争の均衡の比較静学の可能性をめぐる論争につながるという流れを明らかにすることを試みた。
- ・デムゼッツらの論争は独占的競争の均衡のnormativeな意味付けに関わるものだったが, 今回の研究はpositiveな意味付けに関わる論争を扱ったものになった。残された課題は, この流れがLSEの実証経済学のグループなどを経由して特性アプローチによる独占的競争理論の復活につながるまでを整理することである。

【研究成果・公刊計画】

【雑誌の部】 「独占的競争の理論と経済学方法論: 「シカゴ学派」による批判に関する論争1947-1963」, 『南山経済研究』, 第17巻第3号, 2003年3月 pp. 305-326, 上田 薫

◎ 宮澤 和俊 経済学部経済学科

【研究課題】少子高齢化の経済効果

【研究の種類】個人

【研究実績の概要】

研究経過

- ・研究補助者を雇用し, 先進国の少子高齢化の現状と関連文献の調査をおこなう。
- ・経済成長理論に関する文献を調べ, 経済モデルの立案, 構築の基礎を固める。
- ・社会保障制度, 特に賦課方式年金制度, に関する文献を調べ, 経済モデルの立案, 構築の基礎を固める。

研究成果

- ・単著論文“Social Security as Education Subsidies”の執筆。
- ・同論文において, 賦課方式年金制度と経済成長率の関係を理論的, 定量的に分析した。特に, 年金の負担と給付がリンクされるような制度においては, 社会保障制度が教育補助政策と同等の役割を演ずることを示した。
- ・同論文を, 『南山経済研究』(2002年6月)に公刊した。

【研究成果・公刊計画】

【雑誌の部】 “Social Security as Education Subsidies”, 『南山経済研究』, 第17巻第1号, 2002年6月, pp. 59~70, Kazutoshi MIYAZAWA

◎ 唐澤 幸雄 経済学部経済学科

【研究課題】小国開放経済における安定化政策と成長

【研究の種類】個人

【研究実績の概要】

研究経過

- (1) 研究視点、枠組みを限定し、明瞭にするために既存の研究を整理・検討し、学会・研究会などを通して他の国内研究者との意見交換を行った。
- (2) 目的となるモデルを作成した。また、データの収集やシミュレーション分析などの準備を行った。

研究成果

唐澤 幸雄, 藤井 紀和,

「新古典派貿易理論の動学的展開 —無限期間モデルと OLG モデルを中心に—」, 『南山経済研究』第 17 卷第 3 号, pp. 263-285, 2003 年 3 月

【研究成果・公刊計画】

[雑誌の部] 「新古典派貿易理論の動学的展開 —無限期間モデルと OLG モデルを中心に—」, 『南山経済研究』, 第 17 卷第 3 号, 2003 年 3 月, pp. 263~285, 唐澤 幸雄, 藤井 紀和

◎ 小林 佳世子 経済学部経済学科

【研究課題】法の経済分析

【研究の種類】個人

【研究実績の概要】

研究経過

- ・毎月一度のペースで、倒産法の経済分析に関する研究会出席。
- ・上記研究会にて、11 月にサーベイ論文発表。
- ・5 月に、小樽の日本経済学会にて論文発表。
- ・9 月に、アメリカ合衆国ペンシルバニア大学大学院経済学研究科のワークショップにて、論文発表。
- ・10 月に、南山大学経済学会にて論文発表。
- ・11 月より、月に約一度のペースで、契約の理論研究会に参加。4 月に発表予定。

研究成果

- ・わが国において、現在、戦後最大規模の司法改革が行われている。そのひとつの争点のが、裁判費用の負担を、現行制度である当事者負担制度から、敗訴者負担制度への改革である。こうした変化がどのような影響を及ぼすかについての一連の研究を行い、その一部をこのたび“A Note on Bargaining Power and Settlement under Alternative Litigation Fee Rules”として公刊した。

【研究成果・公刊計画】

[雑誌の部] “A Note on Bargaining Power and Settlement under Alternative Litigation Fee Rules”, 『南山経済研究』, 第 17 卷第 3 号, 2003 年 3 月, pp. 327~341, Kayoko Kobayashi

◎ 高橋 弘司 経営学部経営学科

【研究課題】組織コミットメントの形成メカニズムならびに時系列変化要因の探索

【研究の種類】個人

【研究実績の概要】

1. 「時系列的変化」に関する定量的調査

本研究の経過としては、助成決定後、昨年度研究テーマの継続として懸案であった定量的調査(質問紙)を実施し、企業の協力もあって組織コミットメントの時系列的変化に関して 1,000 件以上のデータが得られた。これを基に、本報告には掲載できなかったが第 25 回国際応用心理学会において報告を行った(2002 年 7 月)。この報告は成果③において近々公刊の予定である。

2. 「形成要因」に関する定量的調査

これとほぼ同時期に、組織コミットメント形成に大きな影響を与える要因のひとつと考えられる「組織再編策」(具体的には人員削減・リストラ)をアナウンスした企業とアナウンスしていない企業従業員を対象に、組織コミットメントへのインパクトを探索する定量的調査を実施し、合計で 300 名以上のデータを得ることができた。その結果については、3 月に開催された産業・組織心理学会研究会において報告を行った。この報告はできる限り速やかに論文として発表したい。

3. 「形成要因」に関する定性的調査

その後、2002年8月から12月にかけて組織コミットメント形成要因として非常に重要な意味を持つ「心理的契約」(psychological contract)に関する定性的調査(面接)を行い、昨年度の10名に加えてさらに10名程度のデータを蓄積することができた。この結果は成果②において公刊の運びとなっている。

4. その他

組織コミットメント研究は、昨今再び脚光を浴びてきている。今後の研究の進捗を見越し、既に公表された欧米の組織コミットメントならびに関連尺度の翻訳を積極的に実施した。原著者とのやり取りを通じて、良好な研究上の関係を築けたものと自負している。また、組織コミットメントの交差文化的比較に関するパイロット・サーベイも本年1月に実施し、次年度以降の足がかりを堅固に作ることができた。本年度は公刊が遅れてしまった論文が多いが、次年度は是非継続して遅れを取り戻し、さらなる発展を目指していきたい。当初計画に照らした達成度は、75-80%と評価している。

【研究成果・公刊計画】

〔雑誌の部〕 “Spurious Loyalty of Japanese Workers as an Emergence of False Commitment”, 『南山経営研究』, 第17巻第3号, 2003年3月, pp. 201~216, 高橋 弘司, 渡辺 直登
未発表(投稿中)「組織コミットメント形成要因としての心理的契約——ホワイトカラー従業員面接調査の結果から——」, 『南山経営研究』, 第18巻第1号, 2003年6月(予定), 高橋 弘司, 2002年度実施調査に基づく
未発表(執筆中)「組織コミットメントの時系列的変化およびその原因——「J字型」カーブをめぐる——」, 『経営行動科学』(予定), 高橋 弘司, 2002年度実施調査に基づく

◎ 中谷 実 法学部法律学科

【研究課題】政教分離をめぐる司法消極主義と積極主義

【研究の種類】個人

【研究実績の概要】

1. 日本国憲法は、戦後、アメリカの大きな影響の下、司法制度を変革し、司法権は従来からの民事・刑事事件の他に、行政事件を射程におさめるとともに、違憲審査制を備えるに至った。この違憲審査制の性格につき、当初、そして、その後も、学説上、司法裁判所型の付随的審査制であるか、それとも抽象的審査制を内包させる憲法裁判所型であるかが争われてきたが、実務上は、昭和二七年の警察予備隊違憲訴訟を経て、アメリカ型付随的審査制として定着し、半世紀の間に、多数の憲法判例が産み出されている。
2. しかし、わが国の最高裁による違憲判決が極めて少ないことから、司法消極主義という評価が一般的であり、批判の多いところであった。そのような評価を背景に、英米法の研究者であり、また、最高裁判事でもあった伊藤正己氏が、大陸型の憲法裁判所の導入を提言し、その後、伊藤教授の流れを汲んだ提言がなされるとともに、他方、このような提言に対する反論も見られる。
3. 本研究は、双方の主張とも、憲法訴訟五〇数年の全体像をきっちりと捉えていない、という欠陥をもつという認識にたつて、憲法各分野の最高裁、下級審判例の網羅的・体系的・時系列的分析に基づいたより緻密な運用実態の分析をこころみようとするものである。
4. そこで、本年は、政教分離をめぐる憲法訴訟を網羅的にとりあげ、最高裁の法廷(多数)意見、補足意見、反対(少数)意見、さらに、下級審に見られる様々な憲法判断のテクニックを、筆者の消極主義、積極主義の枠組をもって整理・分析し、さらに、各テクニックを支えていると思われる「政教分離観」や「司法哲学」を抽出するとともに、学説の対応も検討した。
5. その結果、《消極主義Ⅰ》のテクニックとして、「被告適格なし」テクニック、「事件性なし(行為完了、具体的権利関係なし)」テクニック、「法的保護に値する利益侵害なし」テクニックが、《消極主義Ⅱ》のテクニックとして、「制度的保障/法的利益侵害なし」テクニック、「制度的保障/政治責任」テクニック、「制度的保障/習俗・記念碑」テクニック、「制度的保障/目的効果基準」テクニック、「制度的保障/法的利益侵害なし(違憲もしくは違憲の疑い)」テクニックが、《積極主義Ⅰ》のテクニックとして、「私人としての行為」テクニック、「制度的保障/目的効果基準・違憲・しかし明白でない」テクニック、「制度的保障/目的効果基準・違憲・しかし過失なし」テクニック、「制度的保障/目的効果基準・違憲」テクニック、「制度的保障/目的効果基準・違憲・公序」テクニック、「厳格分離・憲法の禁ずる宗教的活動の広い定義」テクニック、「89条違反」テクニック、「89条違反・特権付与」テクニック、「特に許容するに値する高度な法的利益の明白性」テクニック、「完全分離の不可能性の証明」テクニックを抽出することができ、それらのテクニックを様々な観点から検討した。本年度は、《消極主義Ⅰ》のみしか発表できなかったが、今後、順次、発表していきたい。

【研究成果・公刊計画】

〔雑誌の部〕 「政教分離をめぐる司法 消極主義と積極主義(一)」, 『南山法学』, 第26巻第3・4号, 2003年3月, pp. 1~22, 中谷 実

◎ 高橋 広次 法学部法律学科

【研究課題】 アリストテレスの法・国家思想研究

【研究の種類】 個人

【研究実績の概要】

奨励金のおかげで不完全であったアリストテレス原典も全て揃い、それと対照させながら、かねてより蒐集していた第二次文献を読み進めていたが、おびただしい量にのぼるため、納得できるまで構想が熟さないままだったところ、10月末の南山法学会で研究報告準備のため、小職の別の課題である「エコロジー法理論と憲法改正問題」に取り組むことになり、その延長で、年度末公刊の南山法学第26巻にその成果の一端を掲載することに専念することになったため、アリストテレス研究は一応中断の止む無きに至った。来年度は研究休暇を一年間認められているので、このまとまった期間を利用して、何らかの目途をつけたい。その成果の公刊は、帰国後、南山法学第27巻第4号への寄稿執筆によって果たしたいと考えている。

【研究成果・公刊計画】

[雑誌の部] 「アリストテレス法思想におけるプロネーシスの概念について」、『南山法学』、第27巻第4号、2004年3月刊行予定、p.50、高橋 広次

◎ 田中 実 法学部法律学科

【研究課題】 中世・近世法解釈方法論

【研究の種類】 個人

【研究実績の概要】

1. 一次史料の収集・講読

(慶応義塾大学、フランクフルト・マックス・プランクヨーロッパ法史研究所、ケルン大学近世私法史研究所にての史料講読、古書店からの法学文献購入)

2. 法制史学会近畿部会での研究発表

3. 論稿の執筆

【研究成果・公刊計画】

[図書の部] 『法における歴史と解釈』「一五世紀普通法学の法解釈方法論」担当、法政大学出版社、2003年3月、pp.41~92、金山 直樹編、共著

◎ 伊藤 司 法学部法律学科

【研究課題】 内縁法理の再検討

【研究の種類】 個人

【研究実績の概要】

1. 内縁解消時の財産分割に関する判決を収集し、分析および検討を行った。大まかな傾向はつかめたと思われるが、再検討のための視座の獲得が未だ十分でない状態である。

2. 再検討のための視座を得るため、欧州人権裁判所における事実婚および同性婚に関する判決や決定を収集し分析を行っている。この検討も未だ結論を得るにいたっていない。

【研究成果・公刊計画】

[雑誌の部] 「内縁解消時における財産の取り扱い(仮題)」、『南山法学』、掲載予定、伊藤 司

「欧州人権裁判所における事実婚・同性婚(仮題)」、『南山法学』、掲載予定、伊藤 司

◎ Cavallar, Osvaldo 総合政策学部総合政策学科

【研究課題】 Medieval Legal Culture: Citizenship and Criminal Law

【研究の種類】 個人

【研究実績の概要】

O. Cavallar, "Una figura di bandito in un *communicato colloquio* di Guicciardini", in *Bologna nell' et di Carlo V e Guicciardini*, ed. By E. Pasquini and P. Prodi (Bologna 2002), pp.109-150. **Content:**Citizenship is a key concept of the early modern state. Shifting boundaries is also a key ingredient of the formation of the early modern state. Given these two elements, the paper looks at the identity of a criminal in a very volatile situation. The conflict between the citizenship that the person claimed for himself and

the citizenship that political authority (the city of Florence) attributed to him was solved by the jurists. The paper also gives the critical edition of the relevant consilium on this case of identity penned by two major Florentine jurists: Francesco Guicciardini and Antonio Strozzi. The paper also shows how this particular gender of *consilia*, the *communicato colloquio*, was written.

【研究成果・公刊計画】

[図書の部] “Una figura di bandito in un *communicato colloquio* di F. Guicciardini”, *Il Mulino*, 2003年, pp. 109~150, Osvaldo Cavallar

◎ 深井 慈子 総合政策学部総合政策学科

【研究課題】 持続可能な世界秩序構築と貿易・投資のシステム改革—EU と OECD における取り組みを通して考える

【研究の種類】 個人

【研究実績の概要】

申請書に掲げた第一段階の欧州連合に関する研究を重点的に行った。

1. 持続可能な世界秩序達成をめざす貿易・投資システム改革
a. 欧州連合における研究と政策提言を最終文書のみならず、そこに至る過程で関わされた議論にさかのぼり、持続可能性論に関する欧米の著作・論文を広範に調査した。
b. この研究の結果、経済体制に関する青写真は、申請書で予期した以上に多彩で、分析の精緻化のためには、
①グローバル経済への統合促進論と「アウトルキー」論を両端とする横軸に加えて、
②市場経済と計画経済を縦軸とする座標を用いることが有用だと判明した。
c. さらに、政治体制に関しても、持続可能な世界秩序達成を、①主権国家を主体とする現体制の延長線上に展望するもの；②国家の主権が超国家レベルに移転するシナリオ；③サブ国家レベルに分散移行する多彩なシナリオが競合しており、その検討なくしては持続可能な世界秩序論の全貌を捉えられないことが明らかになった。
2. 欧州議会・訪問研究
以上の研究により、欧州連合諸国の間においても、多様なヴィジョン、戦略、実践例が存在し、その実践の結果いかんで、いずれが勢力を伸ばすか、その可能性も大きく変化し、さらに、技術の変化次第で、全く新しいアイデアが生まれる可能性も高く、事態は極めて流動的であることが明らかになった。そこで新しい動きと、その背景要因を探るため、2002年6月、開会中の欧州議会を訪問して緑の党の議員をインタビューし、未公開関連資料を収集した。
3. オーバン大学・資料収集
2002年9月、米国オーバン大学において、欧州とは異なる政治文化をもつアメリカにおける研究者の意見を調べるとともに、英文書籍・論文資料の収集をした。
4. 研究成果の発表(1)：論文
5. 研究成果の発表(2)：学会発表(予定)：CEEISA/ISA(国際研究学会/中東欧国際研究学会合同大会) Budapest, Hungary, 2003年6月27日；表題：Socio-Cultural Impacts of Foreign Direct Investment: A Blind Spot in the Debate on an International Investment Regime
6. 研究成果の発表(3)：著書(予定) 仮題：持続可能な世界秩序論：ヴィジョン・戦略・政策

【研究成果・公刊計画】

[雑誌の部] “Sustainable World Visions and Epistemic Communities”, 『アカデミア』人文・社会科学編, 第76号, 2003年1月, pp. 263~323, Shigeko N. Fukai

[図書の部] 『持続可能な世界秩序論：ヴィジョン・戦略・政策』, 2003年9月(予定), 深井 慈子

◎ 小林 武 総合政策学部総合政策学科

【研究課題】 憲法改正とその手続法制定をめぐる法理上の諸問題の研究

【研究の種類】 個人

【研究実績の概要】

1. 研究経過

本研究は、頭初に立てた研究計画にもとづいて、憲法改正をめぐる憲法学上の諸論点を、わが国の現実の憲法改正動向との関連を考慮しつつ検討した。とりわけ、今日進行している国会憲法調査会における作業に注目し、それを追跡することにとめた。

その推移の中で、憲法改正の手続にかんする立法が浮上し、そこには法理上の重要な問題が包含されているため、これに留意した。それは、国会の発議手続を定める国会法改正案と、それを受けてなされる国民投票についての法案であるが、発議の議決要件・方式など、国民主権のあり方にまで遡るべき論点を取り上げた。

上記のような研究の遂行のために、憲法調査会については、参考人公述を中心とする調査活動を知るべく、文献による検討を進めつつ、加えて国会に赴いた。また、憲法調査会がしばしば開催している地方公聴会にも注目し、その開催地を訪ねて調査をおこなった。憲法改正手続法案については、立法資料を集めて考察した。

2. 研究結果

本研究の結果は、別欄に記載のとおり、アカデミア人文・社会科学編 76 号掲載論文によって公刊した。ここでは、まず、憲法調査会における論議動向を逐時的に追跡し、そのうちとくに衆議院調査会の中間報告とりまとめ作業を重視し、そのもつ意義と問題点を論じた。またその際、国会各会派の憲法改正についての見解も取り上げ、改憲動向の中でそれぞれのもつ意味に言及した。

そして、改憲手続法制定をめぐることは、法案が、改正原案提出権を内閣にも認めたこと、両院協議会の設置を予定したことなどについては疑問を呈し、また、改正点が複数にわたる場合は原則として各条項ごとに賛否を問う方式が採られるべきことを論じた。

憲法改正は、民主主義のあり方を問う憲法原理上のテーマであるだけに、今回の研究を踏まえて、今後とも研究の主要な一対象としつづけたい。

【研究成果・公刊計画】

〔雑誌の部〕 「憲法改正および改正手続法制定動向の検討—憲法調査会における憲法論議の経緯と意味（三）—」、『アカデミア』人文・社会科学編、第 76 号、2003 年 1 月、pp. 517～558、小林 武

◎ Lim, Robyn 総合政策学部総合政策学科

【研究課題】 The Geopolitics of East Asia

【研究の種類】 個人

【研究実績の概要】

In 2002, I completed the manuscript of my book for Routledge/ Curzon Press, UK. The book is entitled *The Geopolitics of East Asia: The Search for Equilibrium*. The book takes an historical /geographic approach to the problems of East Asian security, tracing how the eastern edge of the Eurasian landmass became the global focus of unresolved great power strategic tension.

In addition, I have been writing about the North Korean nuclear problem, including for the international press. I am also writing an article for *Academia* on the North Korea problem.

【研究成果・公刊計画】

〔雑誌の部〕 “Japan as the ‘new South Korea’?”, *Academia Humanities and Social Sciences*, 77, June 2003

〔図書の部〕 *The Geopolitics of East Asia: The Search for Equilibrium*, Routledge, April 2003, 189p.

◎ 松戸 武彦 総合政策学部総合政策学科

【研究課題】 中国市場経済化に伴う社会意識の社会学的研究

【研究の種類】 個人

【研究実績の概要】

1. 中国の市場経済化に関する文献、および新聞記事の整理、とりわけ、新聞記事に関しては、整理とともに検索もできるようにした。
2. 1990 年以降松戸武彦が手がけた中国における社会意識調査の整理検討。その中から労働意識の変容及び労働移動パターンの変化がみられた。
3. 国会図書館等にて日本で公刊されている文献の検討。市場経済化と株式会社化（国有企業の）に関する意識調査の必要性及び、日常的意識における市場経済化の影響における職場聴取調査を計画。
4. 中国北京にて（12 月）3つの国有企業関係者と懇談、事情を聴取、リストラも含めて、国有企業の従来の体制が大きく変動していることを確認。これに対する意識分析の必要性も確認。
5. 統計データも併用して、『アカデミア』投稿論文を作成。

【研究成果・公刊計画】

〔雑誌の部〕 「中国社会の社会的統合装置と日常的な社会意識」、『アカデミア』人文・社会科学編、第 77 号、2003 年 6 月発行予定、松戸 武彦

◎ 松倉 耕作 総合政策学部総合政策学科

【研究課題】 オーストリア家族法，とくに婚姻法の研究

【研究の種類】 個人

【研究実績の概要】

1) 研究結果 『アカデミア』76号に発表することができた(約100枚)

2) 今後 今回の「婚姻法」，次回の「離婚法」，最後の「妻の地位」の3部作をまとめて，1冊の書物にまとめる予定である。

南山大学学術叢書に申込み済みであるので，これが認められれば，2004年2月頃には，出版できる。

【研究成果・公刊計画】

〔雑誌の部〕 「概説オーストリア婚姻法」，『アカデミア』人文・社会科学編，第76号，2003年1月，松倉 耕作

◎ 目崎 茂和 総合政策学部総合政策学科

【研究課題】 中国・日本の風水比較研究

【研究の種類】 個人

【研究実績の概要】

風水の起源地の中国から，日本や沖縄へ展開した経過を史的に検討するとともに，現代風水の比較する目的である。調査地として日本では平安京に由来する京都，沖縄では首里城や石垣島村落，中国は山水画（風水画とも）のモチーフとなる，桂林，石林などのカルスト地域の景観分析を通して風水の構造（都市，村落）を研究した。その結果は，

①京都の平安京の形態や寺社配置，山水地勢などの関係から，中国古代都城の構造をもちながら，日本独特の風水構造，とくに鬼門説などを解明した。その成果は『京の風水めぐり』に刊行した。

②日本の歴史や地理の教育にも，風水の視点が重視されるべき結果が得られたので，成果「雑誌」に公表した。

【研究成果・公刊計画】

〔雑誌の部〕 「風水で教えよう 日本の地理と歴史」，『月刊地理』，第565号，2002年9月増刊，pp.124～125，目崎 茂和

「フンシーの島，沖縄 風と水と泡盛と」，『カラカラ（伽楽可楽）』，第4号，2002年8月，pp.10～11，目崎 茂和，（随筆（エッセー）風）

〔図書の部〕 『京の風水めぐり』，淡交社，2002年7月，126p.，目崎 茂和

「やんばるの海と山，そして人」『ジュゴンの海と沖縄』，高文研，2002年8月，pp.78～110，目崎 茂和

◎ 須藤 季夫 総合政策学部総合政策学科

【研究課題】 日本外交における東南アジアとアセアン

【研究の種類】 個人

【研究実績の概要】

研究計画に基づき，5～9月は，資料収集と文献サーベイを行い，資料の整理と議論のまとめを行った。その成果は，『アカデミア』に出た論文に反映している。10月以降は，その論文に対する意見交換を東京等で行い，現在新たな論文を作成中である。

【研究成果・公刊計画】

〔雑誌の部〕 “The Emerging Patterns of Japanese Foreign Policy in the 1990s”，『アカデミア』人文・社会科学編，第75号，2002年6月，pp.293～317，Sueo Sudo

◎ 田中 恭子 総合政策学部総合政策学科

【研究課題】 東南華人の実態調査——ミクロの視点から

【研究の種類】 個人

【研究実績の概要】

〈研究経過〉

1. 資料調査・収集

- a. 文献資料：日本国際問題研究所，アジア経済研究所等において，東南アジア諸国における華僑華人をめぐる政治問題を中心に，現地の新聞・雑誌その他の文献資料を閲覧・収集した。インターネットを通じて入手できる現地資料の収集にも努力している。
- b. 聞き取り調査：横浜の中華総商会において，在日華人コミュニティと東南アジアの華人コミュニティとのネットワークについて，初歩的な聞き取り調査を行った。
- c. 学会・研究会・シンポジウムへの参加
学会・研究会等，各種学術会議は，情報収集，意見交換の場として重要であるため，時間の許す限り参加するように努め，以下の学術会議に参加した。アジア政経学会，東南アジア史学会，日本・華僑華人学会，中国現代史研究会，中部東南アジア研究会，現代東アジア研究会，北東アジア労働力移動国際シンポジウム（京都），世界平和のための国際会議（韓国）。

2. 資料整理

現在，資料整理にとりかかっているが，整理の進行は予定より遅れているため，予定に追いつくべく鋭意努力している。

〈研究結果〉

本研究は3年計画であり，今年はその初年度なので，まだ結果を語る段階には至っていないが，初歩段階の成果として，共著書2冊にそれぞれ1篇の論文を発表した。そのほか，過去の論文をまとめた単著書1冊を刊行した。

【研究成果・公刊計画】

〔図書の一部〕 『アジア動向年報2002（共著）』，アジア経済研究所，2002年5月，pp.360～382，福島 光丘，須藤 季夫，水野 順子ほか

『現代南アジア6 世界システムとネットワーク（共著）』，東京大学出版会，2003年2月，pp.327～346，水島 司，秋田 茂，浜下 武志ほか

『国家と移民—東南アジア 華人世界の変容』，名古屋大学出版会，2002年6月，378p.+17 p，田中 恭子，アジア調査会「アジア太平洋賞」受賞

◎ Potter, David M. 総合政策学部総合政策学科

【研究課題】 International Politics as a Public Policy Problem

【研究の種類】 個人

【研究実績の概要】

Research Project Results

The research planned for this year centered on an in-depth review of the international relations literature on international cooperation, policy coordination, policy harmonization, regimes, and the emerging literature on global governance; and on the main theories of domestic public policy. A crucial part of this research involved intensive study of these topics at the University of California Berkeley from July-August, 2002. The work there focused on collection of materials not easily accessible at Nanzan University and its interlibrary loan facilities. Of 560,000 yen originally requested for travel and materials, I received 330,000 yen. I therefore reduced the amount of time at the University of California accordingly. As a result, the project proceeded as follows:

- 1) June-July: identification of key texts and materials for the research
- 2) August: travel to the United States, intensive collection of identified materials for the research
- 3) September-October: collation of materials, clarification of key research areas
- 4) October-December: write-up of research results for publication in a scholarly journal

The results of the research were published in *Nanzan Daigaku Kokusai Kyoiku Senta Kiyo* 3(2002). A preliminary sketch of the project was presented at the Faculty of Policy Studies Kenkyuu Forum in July.

【研究成果・公刊計画】

〔雑誌の一部〕 “How to Think About International Politics as Policy Making”, 『南山大学国際教育センター紀要』，第3号，2002年12月，pp.16～31，David M.Potter

◎ Muncada, Felipe 総合政策学部総合政策学科

【研究課題】 Returning Migrant Workers

【研究の種類】 個人

【研究実績の概要】

Through the research fund, I was able to gather materials for my paper entitled “Returning Migrants: A Brief Literature Review.” The material consists of close to a 1,000 pages of articles from different journals and books. These research articles are important not only as references for the above paper but also for my classes on Labor Migration.

This research looked at different return programs instituted by host countries and the Philippines as the sending country. Why particularly the return migrants to the Philippines? The Philippines had deployed more than 10 million migrant labor around the world. These migrant labor are bound to return sooner or later. I was interested in finding out what programs are in place in host countries and in the Philippines as a sending country.

It is interesting to learn that there are indeed programs for return migrants, especially among European countries. They developed assisted return programs for migrant workers because it was more cost-effective and enduring in the long run. The Philippine government has reintegration programs that offer from psychological counseling to skills training. Furthermore, NGOs and cooperatives offer a variety of services to returning migrants.

Care for migrant worker can still be improved through expanded programs. There is need to expand the Philippine government services so that they cover the education of the Filipino youth on migration. Furthermore, there is a need to offer services to migrant *in situ* -in their place of destination. Finally, linkages between government and NGOs in the Philippines and the in the host countries have to be developed and improved in order to better serve the migrant labor.

【研究成果・公刊計画】

[雑誌の部] “Returning Migrants: A Brief Literature Review”, 『アカデミア』人文・社会科学編, 第77号, 2003年6月発行予定

◎ 野口 博史 総合政策学部総合政策学科

【研究課題】 北部ベトナム紅河デルタ村落における人口動態と人的資源配分政策

【研究の種類】 個人

【研究実績の概要】

1. 研究経過

2002年7月29日から同8月10日にかけて研究協力者2名と共にベトナム社会主義共和国ナムディン省ヴバン県ティンロイ行政村及び同村内コクティン農業合作社において資料収集及び面接調査を実施した。主要収集資料は以下の通り。

- ①1990年作成コクティン合作社集落(xom) 毎戸籍簿計8部(1999年まで追記あり, 複写)
- ②2000年作成コクティン合作社集落(xom) 毎戸籍簿計8部(複写)
- ③ヴバン県新経済区(vung kinh te moi) 移住者に関する報告書(複写)
- ④ティンロイ行政村村外公式移住者名簿(1999年から2002年7月まで, 複写)
- ⑤コクティン合作社人口データ(1990年から2002年前半まで, 半期毎, 1995年から集落毎, 面接調査)
- ⑥コクティン合作社内チャンラム(Tran Lam) 小学校編入・退学者名簿(1995年から2002年7月まで, 複写)
- ⑦2000年から2002年にかけてのコクティン合作社B集落における社会変動状況(結婚, 出産, 死去, 世帯独立, 社会団体への加入, 退出, 非農業世帯状況, 家屋新改築, 屋敷地使用権取得等, 面接調査)
- ⑧ティンロイ行政村における1946年から現在にかけての戦死・行方不明者名簿, 軍事動員に関する一般的状況と総動員数(面接調査)

以上に加えて, 行政村, 合作社幹部, 村民らに対する各種面接調査を計12件実施した。

2. 研究結果

主要な研究結果は以下の通りである。1990年におけるコクティン合作社の人口は3233人, 2001年においては3641人と, 比較的小規模の母集団であるにもかかわらず, ベトナム全土の人口動態と大きな相違は示さなかった。しかし, 合作社戸籍簿から形成された人口ピラミッドを比較すると1990年と2000年にかけて出生は約3割程度まで減少しており, この傾向は集落によって大きな偏差がない。この内1集落は村外移住がほぼ自由化された1989年から数年間に人口の2割が南部へ移住した以外, 大規模な人口流出, 流入は発生していない。1995年から2000年にかけてB集落において農業現金収入が約2倍, 非農業収入が約4倍に増加していること, 合作社指導部の成員が相対的に安定していることを考慮すれば, 1990年代におけるコクティン合作社は政治的・社会的安定のもとで経済発展を達成したと考えられる。

しかし、人口増加率減少の原因は集落毎人口データの統計処理からは確定できない。この原因は経済発展の結果であると同時に、ベトナム戦争終了後の1975年から第三次インドシナ紛争がほぼ鎮静化した1984年にかけての大量軍事動員以降における結婚・出産ブームと密接に関係している。また、現状のデータ状況では1945年における大飢饉による乳幼児死亡と出生減の影響程度も統計的蓋然性として明示し得るに至っていない。

このため、来年度において、行政村においてデータが作成されていない年度毎軍事動員量、代替案として集落毎・年毎の在村者数を各集落長への面接調査によって集積する必要がある。

【研究成果・公刊計画】

〔雑誌の部〕 「ベトナム紅河デルタ村落における人口変動とその要因」、『アカデミア』人文・社会科学編，第78号，2004年1月（予定），野口 博史

◎ 尾崎 俊治 数理情報学部情報通信学科

【研究課題】ソフトウェアエイジング現象の確率モデルによる定式化に関する研究

【研究の種類】個人

【研究実績の概要】

本研究においてはソフトウェア信頼性工学の新しい分野であるリアルタイムソフトウェアシステムの運用環境において、頻繁に観測される「ソフトウェアエイジング (software aging)」と呼ばれる現象に着目し、ソフトウェアエイジングの確率モデルを構築し、ソフトウェアエイジングを理論的に解明する。離散時間の確率モデルによってソフトウェアエイジングの現象を定式化して、処理性能評価尺度を求める。さらに、ソフトウェアエイジングの予防保全政策となる“Software Rejuvenation”の概念をこれらのモデルに取り入れることも試みる。

Software Rejuvenationという言葉は2000年になって初めて米国の(株)IBMによって広告媒体に紹介されたことから、急激に注目を集めている。ソフトウェアエイジングの現象の確率モデルを構築し、ソフトウェアエイジングを理論的に解明するための最初のモデルとして本研究では離散時間確率モデルによってソフトウェアエイジングの現象を定式化して、処理性能評価尺度を解析的および数値的に求める。そのためソフトウェアシステムの内部劣化現象を描写するための確率モデルを構築することを目的とする。

離散時間確率モデルの最も基本的なモデルは予防保全モデルである。予防保全モデルをより一般化して、ソフトウェアエイジングの現象に適用するための第一歩として一般化離散時間発注取替問題について主に研究した。研究成果としては、2003年3月18,19日に慶応義塾大学矢上キャンパスで開催された日本オペレーションズ・リサーチ学会春季研究発表会において研究成果を発表した。

一般化離散時間発注取替問題に関する研究成果は得られたが、Software Rejuvenationの確率モデルとしては十分でない。今後はこれらの成果をより現実の近いSoftware Rejuvenationのモデル化について研究を進展させたい。

【研究成果・公刊計画】

〔雑誌の部〕 “A generalized Discrete-Time Order-Replacement Model”，2003年度日本OR学会春季研究発表会アブストラクト集，2003年3月，pp.28～29，T.Dohi，K.Iwamoto，N.Kaio，S.Osaki

◎ 張 漢明 数理情報学部情報通信学科

【研究課題】形式手法による組み込み制御システムの設計手法

【研究の種類】個人

【研究実績の概要】

本研究の目的は、組み込み制御システム固有の特性を明確にし、組み込み制御システムにおける系統的な設計手法を提示するための基礎技術を提示することである。本研究では、組み込み制御システムの特性を表現するために、ソフトウェアアーキテクチャに着目し、また、系統的な設計手法を提示するために、仕様記述における形式手法の導入と、設計の正しさを保証するための検証技術を開発を試みた。

本研究の研究成果を以下に掲げる。

(1) 形式手法によるソフトウェアアーキテクチャの記述法の提示

ソフトウェアアーキテクチャにおけるソフトウェアコンポーネント間の関係を分析し、ソフトウェアアーキテクチャの形式的な仕様記述の枠組みを提示した。ソフトウェアの開発段階を、分析、設計、および実現の3段階と捉え、それぞれの設計段階に応じた仕様の記述法を考察し、各開発段階に応じたVDM-SLによる形式仕様を記述するための指針を示した。本手法を適用することにより、ソフトウェア開発における形式手法の利用が促進されることが期待される。

(2) 組み込みシステムにおけるソフトウェアアーキテクチャの提示

ソフトウェアの構造は、注目する視点ごとに最適な構造が異なるという事実が存在する。この解決策の一つ

としてアスペクト指向が注目されている。自動販売機のカップ機構制御のソフトウェアアーキテクチャを構築し、これを一般化することで組込みシステムのソフトウェアアーキテクチャを構築する。カップ機構制御のソフトウェアアーキテクチャを構築するさいに、複数の視点から見て整理された構造を得るためにアスペクト指向を適用した。ハードウェア制御と時間制御をアスペクトとして分割することで、組込みシステムの開発に有効なアーキテクチャを提案した。

【研究成果・公刊計画】

[雑誌の部] 「VDM-SL によるソフトウェアアーキテクチャの記述法」、『アカデミア』数理情報編, 第3巻, 2003年3月, pp. 53~60, 張 漢明, 野呂 昌満

「組み込みソフトウェアのアスペクト指向ソフトウェアアーキテクチャ」, ソフトウェア・シンポジウム 2003 (投稿中), 熊崎 敦司, 後藤 修平, 野呂 昌満, 張 漢明

「VDM-SL によるソフトウェアアーキテクチャの仕様記述の試み」, ソフトウェア・シンポジウム 2003 (投稿中), 張 漢明, 野呂 昌満, 熊崎 敦司

◎ 蜂巢 吉成 数理情報学部情報通信学科

【研究課題】内容, レイアウト, スタイル, 文書間構造に基づいた HTML 文書の作成支援

【研究の種類】個人

【研究実績の概要】

- ・科学技術文書の構造を線形木構造としてモデル化した。
- ・線形木構造をした HTML 文書を記述するための XML を用いたマークアップ言語 PSML を設計した。
- ・PSML で記述された文書を HTML 形式に変換する処理系を作成した。
- ・PSML で大学の講義資料を作成し, その有効性を確認した。
- ・以上の成果をまとめて学術雑誌に投稿し, 発表した。なお, 発表資料も PSML により作成した。

【研究成果・公刊計画】

[雑誌の部] 「XML を用いた HTML 文書の管理」、『ソフトウェア工学の基礎IX』, 近代科学社, 2002年11月, pp. 167~170, 蜂巢 吉成

「XML を用いた web 講義資料の作成支援」, 平成 14 年度情報処理研究集会, 2002年10月, pp. 323~326, 蜂巢 吉成, パッへの記載なし

◎ 児玉 靖司 数理情報学部情報通信学科

【研究課題】システムソフトウェア構成のためのソフトウェアパターンおよびフレームワークの提案

【研究の種類】個人

【研究実績の概要】

- ・情報処理学会, 電子情報通信学会, 日本ソフトウェア科学会などの論文誌より, 最近の研究動向を調査した。
- ・メインとなる PC と, Linux のデバイスドライバを試作するための PC が必要となり, PC(中古) を, 用品費で購入した。
- ・デバイスドライバを, 新たに設計するために, Linux の構成をソースコードレベルで調査した。関連する文献を調査し, プリンタで印刷するための費用が必要となった(消耗品費)。
- ・デバイスドライバを調査する際には, フロッピディスクの他, ネットワーク関係のデバイスドライバが採用できないかを考察した。ネットワーク関係の機器を, 用品費より購入した。
- ・(7月)ソフトウェアパターンを用いたデバイスドライバ構成に関しての新しい手法を提案した。ソフトウェアシンポジウム 2002 において「デバイスドライバ構成のためのソフトウェアアーキテクチャ」(査読付き)を発表した(旅費交通費, 参加費)。
- ・(9月)プログラミング言語の静的解析に関する新しい手法を提案した。日本ソフトウェア科学会第 19 回全国大会において「値グラフを用いた命令言語のための型推論アルゴリズムの提案」を発表した。
- ・さらに, アスペクト指向プログラミングの手法を, デザインパターンを用いて設計できないかを調査した。アスペクトの切り替えを静的に行うか, 動的に行うかが問題となっていることを知り, 動的にできる手法を, デザインパターンを用いて構成した。特に, 並列プログラミング言語は, SMP(Symmetric Multi Processors) や, PVM(Parallel Virtual Machine) など, さまざまな環境に適用させる必要があり, 我々は, 新たに, 動的に適用させる手法を考案した。
- ・(11月)上の発表の技術を, 並列プログラミング言語環境に適用し, FOSE'02 において, 「アスペクト指向を用いた並列オブジェクト指向実行時環境構成のためのフレームワーク」(査読付き)を発表した。
- ・以上, 論文をまとめるための消耗品を購入した。
- ・上の並列プログラミング言語環境の部分をもとめ, 南山大学紀要「アカデミア」数理情報学編に投稿した。

【研究成果・公刊計画】

[雑誌の部] 「並列オブジェクト指向言語による並列計算機上での効率的並列計算」, 『アカデミア』数理情報編, 第3巻, 2003年3月, pp.19~23, 児玉 靖司

◎ 伏見 正則 数理情報学部数理科学科

【研究課題】 準モンテカルロ法の理論と金融工学への応用

【研究の種類】 個人

【研究実績の概要】

1. (t, s)-sequence に関する研究

(研究目標) 準モンテカルロ法で用いられる点列である (t, s)-sequence の一様分布性は, t の値によって計られ, t の値が小さいものほど一様分布に近いとされている。この t の値は, s 次元の単位立方体を基本区間と呼ばれる等体積の直方体に分割したときに, 各直方体に同数の点が含まれているかどうかによって計算されるが, これは, 最悪の状況によって決まる厳しい基準である。しかし, (t, s)-sequence を使った種々の計算結果によれば, t の値が相当に大きな点列でも, きわめて精度のよい結果が得られることも多い。このような状況の根拠を理論的に解明するのが目標である。

(研究経過) あらゆる等体積の基本区間への分割パターンをチェックして, その中で基本区間に同数の点が含まれるパターンの個数を数え上げ, それが全パターンの個数にどのくらい近いかわかる。そのための基本的な演算として, 基本区間のパターンに対応する行列の階数の計算が必要になるので, この部分で計算量を減らす工夫を行った。

(研究結果) 最悪の状況によって決まる t の値が大きい点列でも, 上記のパターンのチェックの意味では良い性質を持つものが多いことが確認され, 上記の経験則の理論的裏づけが得られた。

(研究発表) MCQMC2002, シンガポール大学, 2002年11月25-28日。

2. 準モンテカルロ法の金融工学への応用

(研究目標) 金融工学において必要になる計算に準モンテカルロ法を応用して, 精度のよい計算結果を短時間で得る方法を開発する。

(研究経過) アメリカ型のオプションの理論価格を計算する方法として, Broadie and Glasserman が提案したランダム木を用いるモンテカルロ法があるが, これを準モンテカルロ法を用いるように変更するとどのような効果があるかを実験によって確かめた。

(研究結果) 準モンテカルロ法を使うほうが精度のよい計算結果が得られることが確認できた。

(研究発表) J. of the OR Society of Japan, Vol.45, No.4, Dec.2002.

【研究成果・公刊計画】

[雑誌の部] “Quasirandom Tree Method for Pricing American Style Derivatives”, *Journal of the Operations Research Society of Japan*, Vol.45, No.4, 2002年12月, pp.426~434, Hozumi Morohosi, M. Fushimi

◎ 木村 美善 数理情報学部数理科学科

【研究課題】 ロバスト回帰の理論とその応用に関する研究

【研究の種類】 個人

【研究実績の概要】

本研究テーマは, 国際的には非常に関心が高いものであるが, 我が国では研究者が少ないため, 研究遂行にあたっては何かと難しいこともあったが, 下記の研究成果を得ることができた。

論文:

1) “Robust slippage rank tests for k location parameters in the presence of gross errors”
Technical Report No.2002-3 Mathematical Sciences and Information Engineering, Nanzan Academic Society, 2002年12月

2) 「ロバスト推定におけるバイアス・ロバストネス理論とその応用」
京都大学数理解析研究所講究録, 2003年5月(予定)

学会発表:

1) “Maximum bias of robust estimates in linear regression with non-elliptical regressors”
第70回日本統計学会, 明星大学, 2002年9月10日

2) “Slippage rank tests for k location parameters in the presence of gross errors”
科学研究費によるシンポジウム「量子推測理論の数理統計学的基礎とその応用」
鹿児島県市町村自治会館, 2002年10月18日

3) 「ロバスト推定におけるバイアスーロバストネス理論とその応用」

研究集会「漸近的統計理論」京都大学数理解析研究所，2002年11月21日

【研究成果・公刊計画】

〔雑誌の部〕 “Robust slippage rank tests for k location parameters in the presence of gross errors”，
Technical Report No.2002-3 Mathematical Sciences and Information Engineering, Nanzan Academic Society,
2002年12月, pp.1~14, Itsuro Kakiuchi, Miyoshi Kimura

「ロバスト推定におけるバイアスーロバストネス理論とその応用」, 京都大学数理解析研究所講究録, 2003年5月
(予定), 安藤 雅和, 木村 美善

◎ 鈴木 敦夫 数理情報学部数理科学科

【研究課題】緊急車両の最適配置計画の研究

【研究の種類】個人

【研究実績の概要】

- ・緊急車両，特に救急車の最適配備計画の数理モデルを作成した。このモデルは，待ち行列の手法を最適配置問題に適用したもので，従来は困難で解法も実用規模の問題には適用できないものだった。従来のモデルは，救急車が出動中に別の事故が起こり，それに対応するために別の場所に配備されている救急車が出動する状況をうまく反映することができていなかった。それに対して，我々のモデルは，すべての起こりうる事態を状態遷移図に表し，その状態間の推移確率を適切に定めることによって，このことをうまく反映できるようにした。
- ・我々のモデルでは，解法に大規模な線形1次方程式の解法を含む。これは，数学ソフトのMATLABを用いて実現し，PCを用いて，実用的な計算時間で5台の救急車の配備計画まで検討できるようにした。
- ・このモデルを用いて，愛知県瀬戸市の救急車の配置状況を検討した。瀬戸市では現在，4台の救急車が配備されているが，この配備が，現場到着時間を最短にするものであることを確認した。成果は，2003年度日本オペレーションズ・リサーチ学会春季研究発表会で発表した。
- ・今後，研究発表で受けたコメントも反映して，学術論文として成果をまとめる予定である。大学に成果として提出するのはこの論文としたい。

【研究成果・公刊計画】

〔雑誌の部〕 「愛知県A市における救急車の最適配備問題について」, 2003年度日本OR学会春季研究発表会予稿集, 2003年3月, pp.50~51, 稲川 敬介, 鈴木 敦夫

◎ 高見 勲 数理情報学部数理科学科

【研究課題】多自由度制御方式による非線形プロセスの制御性向上

【研究の種類】個人

【研究実績の概要】

1. プラント，機械装置など産業界において実用化が推進されているPID制御（比例・積分・微分制御）に関する以下の調査検討を行い，PID制御の適用方式を纏めた。
 - (1) PID制御適用理由…①構造が単純，②現場調節が容易，③十分な制御性，④実装が容易，⑤実用性が高い，⑥応用が容易，⑦信頼性が高い，等
 - (2) PID制御方式の比較…①古典的PID，②微分先行型PID，③I-PD，④2自由度PID，⑤適応PID，⑥非線形補償PID，⑦フィードフォワード補償PID，等
 - (3) PIDパラメータ調整法…①Ziegler-Nichols法，②Chien Hornes and Reswick法，③極配置法，④部分モデルマッチング法，⑤擬似極配置法，⑥Double-Zero法，等
2. 冷熱プラントの一つであるビル空調設備のGHP(Gas Heat Pump)を対象としてPID制御適用による制御性向上を検討し以下の成果を得た。
 - (1) 実績運転データを分析したところ，GHPは動特性に無駄時間を含み，動作点により特性が異なる非線形系である。特性変動に対するロバスト性の保障が必要である。
 - (2) 外乱抑制と目標値追従の機能を持たせるには2自由PID制御が有効である。またこの時，目標値変動に伴う過剰応答解消に微分先行型あるいはI-PD制御を採用する。
 - (3) 希望の応答特性を実現するために，極指定方式を導入し，安定で応答が速い系とする。また既知外乱に対してはフィードフォワード補償により抑制を行う。
3. シミュレーション検証による制御性の確認…計算機上にGHPの非線形モデルを構築し，これと制御系を結合し，数値シミュレーションを行い以下の成果を得た。
 - (1) 動作点が945rpmにおける最適チューニングを行い，これに対し945及び1520rpmでの目標値変化と外乱変

動を印加した。その結果両ケースとも十分な制御性を得た。

- ・ 制御時間：3秒以内、・ オーバーシュート量：目標値 5rpm 変化で 1rpm
- ・ 応答波形：不安定な波形とならず、十分な減衰（1/4 ダンピング以下）となる

(2) I-PD は目標値変化に対し微分先行型 PID よりも良好な応答が得られる。また外乱に対しては両 PID ともほぼ同様の応答となる。

4. 以上のことより以下の結論を得た。

- (1) GHP の制御には PID 制御の適用が望ましい。
- (2) 制御系は 2 自由度微分先行型 PID（あるいは I-PD）を基本とし、必要に応じてフィードフォワード補償、非線形ゲイン補償により制御性とロバスト性を向上させる。

【研究成果・公刊計画】

〔雑誌の部〕 「非線形プロセスに対する 2 自由度 PID 制御の適用」、『アカデミア』数理情報編，第 4 巻，2004 年 3 月（予定），高見 勲

◎ 佐々木 克巳 数理情報学部数理科学科

【研究課題】 解釈可能性の論理の研究

【研究の種類】 個人

【研究実績の概要】

本研究では、解釈可能性を含め、GL の拡張論理のなかである算術的な解釈をもつものに対してカットのないシーケントの体系の構築を試み、以下の結果を得た。

1. 最小の解釈可能性の論理 IL に公理 $P: (p \triangleright q) \sqcap \Box (p \triangleright q)$ を加えてできる論理 ILP にカットのないシーケントの体系を与えた。この体系はある意味での部分論理式特性をもち、ILP の決定アルゴリズムを与えている。IL にカットのないシーケント体系を与えたときの手順が、ここでも用いることができた。すなわち、K4 に対応する ILP の部分論理 IK4P のシーケント体系も構築し、カット除去定理を証明し、レーブの公理の性質を用いて ILP のカットなしのシーケントとした。
2. 解釈可能性の論理とは別の方法で、証明可能性の論理 GL を拡張した論理についても結果を得た。拡張は、GL の言語に単項の様相記号 ∇ を加えることで行い、この拡張で得られる論理のなかで、 ∇A は算術理論におけるある意味で「A が証明可能である」と解釈される 2 つの論理 MOS と PRL1 を扱った。そして、MOS と PRL1 の部分論理式特性をもつようなカットのないシーケント体系を与えた。

【研究成果・公刊計画】

〔雑誌の部〕 “A cut-free sequent system for the smallest interpretability logic”, *Studia Logica*, 70, 2002, pp. 353~372

“On sequent systems for bimodal provability logics MOS and PRL1”, *Bulletin of the Section of Logic*, 31, 2002, pp. 91~101

◎ 佐々木 美裕 数理情報学部数理科学科

【研究課題】 競合下における協力型ハブ・アンド・スポークネットワークの設計に関する研究

【研究の種類】 個人

【研究実績の概要】

1. 競合下における協力型ネットワークにおいて重要な要素となる枝の容量制約について、その変化が利益に与える影響を調べるために、2001 年度から研究を進めていた容量制約付モデルを用いて、計算機実験を行った。データは、CAB および FAA が提供している航空データを加工して作成した。
2. 上記の計算機実験では、枝の容量制約の変化により最適なハブの配置に大きな影響を与える結果が得られ、これまでの研究では、あまり考慮されてこなかった枝の容量制約が重要な要素の 1 つになっていることが確認できた。一方で、枝の容量制約が変化してもほとんど影響を受けないロバストなハブが存在することも確認できた。
3. ここまでの結果をまとめて、JSOM2002 (The Second Japanese-Sino Optimization Meeting, 2002 年 9 月京都にて開催) で発表し、『南山経営研究』に投稿した。
4. さらに規模の大きなデータ (Australia Postal Data, OR-Library 提供) を用いて実験を行い、ここまでの結果をまとめて *Journal of Operations Research Society of Japan* (査読付) に投稿し、現在、改訂中である。

【研究成果・公刊計画】

〔雑誌の部〕 「枝容量制約付きハブ配置問題」、『南山経営研究』，第 17 巻第 1・2 号，2002 年 10 月，pp. 93~112，佐々木 美裕，福島 雅夫

3. 2002 年度パツへ研究奨励金 I - B (特定図書・設備助成)

採択物件

[金額単位: 円]

| 学部名 | 採 択 物 件 | 担当者名 | 納入額 |
|-----|---|------------------------|-----------|
| 人 文 | 戦後教育改革構想 全 20 巻 別巻 2 | 田子 健 | 192,000 |
| | 犯罪心理学研究 19 巻 (1981 年) ~ 39 巻 (2001 年) | 神谷 俊次 | 160,000 |
| | 性と生殖の人権問題資料集成 全 35 巻 別冊 1 全 12 回配本のうち年度内配本 10 回分 | 林 雅代 加藤 隆雄 | 635,000 |
| | 復刻版 牟婁新報 第 I 期 全 15 巻 別冊 1 | 櫻井 進 | 370,000 |
| | アジア・太平洋地域民族誌選集 第 1 回配本 全 6 巻 第 2 回配本 全 8 巻 | 坂井 信三 クネヒト, ペトロ | 167,000 |
| | 役者評判記 第 3 期 第 3 編 幕末・明治年間・その他 81 点 30 リール | 安田 文吉 | — |
| | 小 計 | 6 件 | 1,524,000 |
| 外国語 | 中国社会学基本文献コレクション 全 80 点 | 松戸 庸子 | 479,250 |
| | Die Grosse Politik der Europäischen Kabinette 1871-1914. | ジップル, リチャード | 340,020 |
| | Psycholinguistics Critical Concepts 6vols. | 村杉 恵子 | 145,236 |
| | TAP CHÍ TRI TÂN 1 号 (1941.6.3) - 212 号 (1945.11.22) | 宮沢 千尋 | 789,750 |
| | 小 計 | 4 件 | 1,754,256 |
| 経 済 | Review of International Economics Vol. 1-5 (1993-1997) | 唐澤 幸雄 | — |
| | European Journal of Political Economy Vol. 1-11 (1985-1995) | 宮澤 和俊 | 500,000 |
| | Legislative History of the Gramm-Leach-Bliley Act 23vols. | 荒井 好和 | 392,000 |
| | 郡是・町村是資料マイクロ版集成 第 5 巻 19 リール | 川崎 勝 | 438,900 |
| | 戦後ドイツ社会政策史 全 21 巻 | 大谷津晴夫 | 35,100 |
| | 小 計 | 5 件 | 1,366,000 |
| 経 営 | Scandinavian Journal of Management Vols. 1-15(1984/85-1999) | 高橋 弘司 安藤 史江 | 1,000,000 |
| | Public Documents of Annual Conference of the International Organization of Securities Commissions 第 12 回 - 第 25 回年次総会 合計 27 冊 | 藤井 達敬 飯田 穆 高橋 弘一 | 609,600 |
| | The Bank of America Journal of Applied Corporate Finance Vols. 1-3(1988/89-1990/91) | 斎藤 孝一 | 235,200 |
| | Organization Behaviour, 1890-1940 全 8 巻 | 高橋 弘司 | 130,900 |
| | 小 計 | 4 件 | 1,975,700 |

2002 年度パツへ研究奨励金 I - B (特定図書・設備助成)

採択物件

[金額単位：円]

| 学部名 | 採 択 物 件 | 担当者名 | 納入額 |
|---------|---|---------------|------------|
| 法 | Recueil des cours de l'Académie de droit International de la Haye Tome 13-30 1set | 青木 清 岡田 泉 | — |
| | ボワソナード民法典資料集成 第Ⅱ期 第2回配本 民法應用字解 他 計3点 第3回配本 「民法草案財産編」 他 計4点 | 奥富 晃 | 268,800 |
| | ドイツ民法基本図書 全116点 | 副田 隆重 | 952,253 |
| | Incunabula Units36 LW107-136 30タイトル | 田中 実 | 556,500 |
| | 小 計 | 4 件 | 1,777,553 |
| 総 合 政 策 | 拓務時報 全14巻 | 浅香 幸枝 | 320,000 |
| | ジュリスト DVD 版 | 松倉 耕作 小林 武 | 220,000 |
| | 旧英領海峡植民地年次行政報告書 The Straits Settlements: Annual Reports 1855-1941 12vols. | 田中 恭子 | 765,000 |
| | Critical Discourse Analysis Critical Concepts in Linguistics 4vols. | 渡辺 義和 | 114,000 |
| | Encyclopedia of Global Environmental Change 5vols. | 目崎 茂和 | 360,000 |
| | 小 計 | 5 件 | 1,779,000 |
| 数 理 情 報 | ギガヒットイーサネットインテリジェントスイッチ GX-08SX | 宮澤 元 | 325,500 |
| | 小 計 | 1 件 | 325,500 |
| | 合 計 | 29 件 | 10,502,009 |

4. 2002年度パスへ研究奨励金Ⅱ－A（学部別研究助成）配分実績一覧

(円)

| 学部 | 助成金 | 消耗品費 | 国外旅費 | 研究旅費 | 通信運搬費 | 福利費 | 印刷製本費 | 賃借料 | 諸会費 | 会合費 | 謝礼費 | 図書支出 | 合計 | 残高 |
|--------|-----------|-----------|--------|---------|--------|--------|--------|--------|--------|--------|---------|---------|-----------|-----------|
| 人文学部 | 1,298,000 | 157,224 | 0 | 498,740 | 0 | 0 | 20,528 | 0 | 0 | 5,000 | 199,998 | 405,446 | 1,286,936 | 11,064 |
| 外国語学部 | 1,258,000 | 320,352 | 0 | 192,520 | 0 | 0 | 0 | 0 | 0 | 7,769 | 373,609 | 0 | 894,250 | 363,750 |
| 経済学部 | 770,000 | 612,781 | 0 | 21,160 | 5,555 | 4,000 | 0 | 0 | 7,000 | 0 | 0 | 0 | 650,496 | 119,504 |
| 経営学部 | 731,000 | 44,575 | 0 | 0 | 0 | 0 | 0 | 0 | 0 | 0 | 0 | 0 | 44,575 | 686,425 |
| 法学部 | 761,000 | 650,470 | 21,160 | 30,000 | 9,223 | 13,000 | 0 | 30,000 | 7,000 | 0 | 0 | 0 | 760,853 | 147 |
| 総合政策学部 | 1,073,000 | 379,085 | 0 | 80,620 | 0 | 0 | 0 | 0 | 0 | 0 | 55,555 | 0 | 515,260 | 557,740 |
| 数理情報学部 | 809,000 | 570,774 | 0 | 63,480 | 0 | 0 | 0 | 0 | 0 | 0 | 0 | 0 | 634,254 | 174,746 |
| 合計 | 6,700,000 | 2,735,261 | 21,160 | 886,520 | 14,778 | 17,000 | 20,528 | 30,000 | 14,000 | 12,769 | 629,162 | 405,446 | 4,786,624 | 1,913,376 |

5. 2002年度パッパへ研究奨励金（海外出張助成）Ⅱ－B配分―一覧

海外で開催される学会発表参加のための渡航費援助。[20万円を上限。(IATA Y2 往復料金の30% (下限8万円), または近距離 (IATA Y2 往復料金が20万円以下) の場合は40%補助]

(配分額は1,000円未満四捨五入) (円)

| No. | 学部 | 申請者 | 国名 | 会議名 | 開催日 | 航空賃 | 配分額 |
|-----|-----|---------------|--------------|---|---------|---------|---------|
| 1 | 外国語 | 森山 幹弘 | フランス | インドネシア・マレーにおける翻訳の歴史に関する国際学会 | 2002. 4 | 509,600 | 153,000 |
| 2 | 人文 | 坂本 正 | 米国・マデISON | Central Association of Teachers of Japanese | 2002. 4 | 437,700 | 131,000 |
| 3 | 総合 | カランタス, テレジャータ | フィリピン | Philippine Association for Language Teaching Inc. | 2002. 5 | 148,200 | 59,000 |
| 4 | 人文 | 奥山 倫明 | ジャマイカ | 国際比較文明学会 第31回大会 | 2002. 5 | 456,400 | 137,000 |
| 5 | 経営 | 高橋 弘司 | シンガポール | 第25回 国際応用心理学会 | 2002. 7 | 235,200 | 80,000 |
| 6 | 経営 | 宮澤 和俊 | フィンランド・ヘルシンキ | 国際財政学会 第58回総会 | 2002. 8 | 509,600 | 153,000 |
| 7 | 総合 | 橋本 日出男 | 中国・重慶 | International Symposium on Operations and Its Applications | 2002. 6 | 187,800 | 75,000 |
| 8 | 総合 | ホーランド, ラウール | モリシヤス | AIEFCOI 国際学会 | 2002. 7 | 722,400 | 200,000 |
| 9 | 総合 | 渡辺 義和 | イギリス | The Sixth Oxford Dysfluency Conference | 2002. 6 | 509,600 | 153,000 |
| 10 | 総合 | 野口 博史 | オランダ | ベトナム村落研究ワークショップ | 2002. 8 | 509,600 | 153,000 |
| 11 | 人文 | 丸山 徹 | ノルウェー・オスロ | First International Conference on Missionary Linguistics | 2003. 3 | 509,600 | 153,000 |
| 12 | 総合 | 松戸 武彦 | 中国・北京 | 北京日本学研究中心ター2002年国際シンポジウム「進化する日本研究」 | 2002. 9 | 158,400 | 63,000 |
| 13 | 人文 | 長倉 久子 | ポルトガル | 第11回 国際中世哲学会 | 2002. 8 | 509,600 | 153,000 |
| 14 | 数理 | 野呂 昌満 | イギリス | 第26回コンピュータソフトウェア・アプリケーション国際会議 | 2002. 8 | 509,600 | 153,000 |
| 15 | 総合 | 梁 晁虹 | 台湾 | 漢文佛典語言学国際学術研討会 | 2002. 8 | 117,800 | 47,000 |
| 16 | 数理 | 澤木 勝茂 | フランス | 2nd Euro-Japan Workshop | 2002. 9 | 509,600 | 153,000 |
| 17 | 数理 | 尾崎 俊治 | フランス | 2nd Euro-Japan Workshop | 2002. 9 | 509,600 | 153,000 |
| 18 | 数理 | キニ, コナド | スペイン | International Conference on Artificial Intelligence and Application | 2002. 9 | 509,600 | 153,000 |
| 19 | 総合 | カバル, オズワルド | イタリア | On tyranny : Bartoro with Machiavelli | 2002.10 | 509,600 | 153,000 |
| 20 | 外国語 | レボラル, バトリック | フランス | Colloque Ecritures en ligne : pratiques et communautes | 2002. 9 | 509,600 | 153,000 |
| 21 | 経営 | 小林 佳世子 | 米国・フィラデルフィア | Shadow Workshop | 2002. 9 | 442,000 | 133,000 |
| 22 | 人文 | キサラ, ロバート | 米国・ソルトレークシテイ | Society for Sientific Study of Religion 宗教の科学的研究会 | 2002.11 | 355,000 | 107,000 |

| No. | 学部 | 申請者 | 国名 | 会議名 | 開催日 | 航空賃 | 配分額 |
|-----|------|-------|-----------|---|----------|----------|-------------|
| 23 | 人文学部 | 斎藤 衛 | 米国・ポスト | アメリカ北東部言語学会 | 2002. 11 | 452, 500 | 136, 000 |
| 24 | 外国語 | 蔡 毅 | 中国・上海 | 東方詩話学会第3回国際學術発表大会 | 2003. 1 | 114, 500 | 46, 000 |
| 25 | 数理 | 尾崎 俊治 | インド・チェンナイ | ランキング, 選択, 多数比較, 信頼性および応用に関する国際会議(2回目の申請) | 2002. 12 | 301, 100 | 90, 000 |
| 26 | 外国語 | 原 不二夫 | 香港 | 第2回研究機関・図書館 華人会議 | 2003. 3 | 148, 200 | 59, 000 |
| | | | | 配分額合計 | | | 3, 199, 000 |

6. 2002（平成14）年度科学研究費補助金交付

| | 交付額 |
|--|-----------|
| 基盤研究 (A) (1) | |
| 「沖積平野の形成過程における土砂貯留機能および炭素蓄積機能の評価」 | |
| 総合政策学部 助教授 藤本 潔 | 580万円 |
| | 間接経費174万円 |
| 基盤研究 (B) (1) | |
| 「コネクショニズムの哲学的意義の研究」 | |
| 人文学部 教授 服部 裕幸 | 210万円 |
| 「海外アイヌ資料に基づくアイヌ文化の地域差・時代差に関する研究」 | |
| 人文学部 教授 小谷 凱宣 | 380万円 |
| 「宇宙論における人間原理に関する自然哲学的研究」 | |
| 人文学部 教授 横山 輝雄 | 170万円 |
| 「都市の交通および施設配置に関する総合的研究」 | |
| 数理情報学部 教授 伏見 正則 | 640万円 |
| 「中国東北部におけるアルタイ語族の諸民俗のシャーマニズムと社会に関する人類学研究」 | |
| 人文学部 教授 クネヒト, ペトロ | 310万円 |
| 基盤研究 (C) (1) | |
| 「マックス・ヴェーバー 二次文献目録の作成」 | |
| 外国語学部 講師 鈴木 宗徳 | 110万円 |
| 「中国におけるグローバリズムの深化と社会構造変動に関する実証的研究」 | |
| 外国語学部 教授 松戸 庸子 | 100万円 |
| 基盤研究 (B) (2) | |
| 「日本宗教史に関する基礎的な研究資料の編集刊行による研究の国際化の推進」 | |
| 総合政策学部 教授 スワンソン, ポール | 230万円 |
| 「価値体系の国際比較（アジア価値観調査）」 | |
| 人文学部 教授 キサラ, ロバート | 190万円 |
| 「清元節の基礎的研究」 | |
| 人文学部 教授 安田 文吉 | 120万円 |
| 基盤研究 (C) (2) | |
| 「ローマ帝政末期におけるキリスト教異端諸派の排斥メカニズムと教会制度確立過程の解明」 | |
| 総合政策学部 助教授 山田 望 | 70万円 |
| 「地球規模航空路ネットワークの拠点空港の最適配置計画の研究」 | |
| 数理情報学部 教授 鈴木 敦夫 | 70万円 |
| 「相互承認論に関する理論的・歴史的研究」 | |
| 外国語学部 教授 加藤 泰史 | 80万円 |

| | | |
|---|-----|---------|
| 「現地聞き取り調査を主要方法とする米国公民権運動史研究」 | | |
| 外国語学部 助教授 川島正樹 | | 150万円 |
| 「粗製土器の多角的分析による縄紋時代集団関係論」 | | |
| 人文学部 助教授 大塚達朗 | | 100万円 |
| 「スクランプリングの比較研究」 | | |
| 人文学部 教授 斎藤 衛 | | 100万円 |
| 「スイスを中心とした現代直接民主政の原理的・実態的比較研究」 | | |
| 総合政策学部 教授 小林 武 | | 160万円 |
| 「公的介護保険、公的年金の経済成長に与える効果－人的資本蓄積、社会保障、および家族制度－」 | | |
| 経済学部 助教授 宮澤和俊 | | 100万円 |
| 「飛躍のある確率微分方程式とマリアヴァン解析の研究」 | | |
| 数理情報学部 教授 国田 寛 | | 80万円 |
| 「エリアード宗教学の形成前史に関する基礎的研究」 | | |
| 人文学部 助教授 奥山倫明 | | 130万円 |
| 「公共圏の中の科学技術に関する科学論的・政治哲学的研究」 | | |
| 人文学部 教授 小林傳司 | | 90万円 |
| 「固定資産宅地評価の数理モデルによる解析とその実用化に関する研究」 | | |
| 数理情報学部 教授 尾崎俊治 | | 170万円 |
| 萌芽研究 | | |
| 「金融工学における精度保証つき高速計算法」 | | |
| 数理情報学部 教授 伏見正則 | | 80万円 |
| 若手研究 (B) | | |
| 「近代日本における少年司法政策の展開と非行少年概念の成立に関する比較社会史的研究」 | | |
| 人文学部 講師 林 雅代 | | 110万円 |
| 特別研究員奨励費 | | |
| 「西田幾多郎－不二の探求」 | | |
| 総合政策学部 教授 スワンソン, ポール | | 80万円 |
| (研究分担者: 客員研究所員 コプフ, ゲレオン) | | |
| | 合 計 | 4,784万円 |

7. 2002年度文部科学省私立大学等研究
設備整備費等補助金交付

| 区分 | 設 備 名 | 交 付 額 |
|------|--|--------------|
| 研究設備 | 東京大学史料編纂所所蔵 大日本維新史料稿本 マイクロ版集成 | 19,102,650 円 |
| | 国立国会図書館所蔵 昭和前期刊行図書デジタル版集成 [社会科学部門] 社会 (個人著作物・団体著作物) | 10,164,000 円 |
| 計 | 2 件 | 29,266,650 円 |

8. 2002年度 学外からの研究助成金・奨励金（採用分）

[金額単位：円]

| 財団等名称 | 申請者 | 申請の種類 | テーマ | 金額 |
|----------------|-------------|--------|-------------------|---------|
| (財) 国際言語文化振興財団 | ハイジック,ジェームズ | 翻訳研究助成 | 日本思想史基本文献のルーマニア語訳 | 500,000 |
| 計 | 1件 | | | 500,000 |

2002年度奨学寄附金

| 入金 | 会社名等 | 金額(円) | 寄付金使用者 |
|------------|---------------------|-----------|-----------------|
| 2002. 4.30 | (株) ピーエフユー 東海支店営業部 | 1,000,000 | 数理情報学部 |
| 2002. 4.16 | (財) 九州システム情報技術研究所 | 800,000 | 張漢明助教授 |
| 2002. 7.31 | 三菱重工業(株) 名古屋研究所 | 300,000 | 高見勲教授 |
| 2002.10.10 | 三菱電機(株) 情報技術総合研究所 | 500,000 | 青山幹雄教授 |
| 2002. 9.30 | (株) 東芝 研究開発センター | 200,000 | 青山幹雄教授 |
| 2003. 1.31 | 東邦ガス(株) 総合技術研究所 | 500,000 | 後藤邦夫教授、コナド・キニ講師 |
| 2003. 2.20 | コネチカット大学(斎藤恵子代理) | 2,046,800 | 村杉恵子助教授 |
| 2003. 2.28 | (株) 東芝 社会・産業システム事業部 | 300,000 | 長谷川利治教授 |
| 2003. 3. 7 | 三菱重工業(株) 神戸造船所 | 600,000 | 高見勲教授 |
| 合計 | 9件 | 6,246,800 | |

2002年度受託研究

| 入金 | 委託会社名等 | 金額(円) | 受託研究者 |
|------------|---------------------|---------|--------|
| 2003. 2.28 | (株) 東芝 S I 技術開発センター | 500,000 | 伏見正則教授 |
| 合計 | 1件 | 500,000 | |

2002年度研究テーマ

| 会社名等 | 寄付金使用者 | テーマ |
|--------------------|--------------------|-------------------------|
| (株) ピーエフユー 東海支店営業部 | 数理情報学部 | |
| (財) 九州システム情報技術研究所 | 張漢明助教授 | 形式手法に基づいた仕様記述法に関する研究 |
| 三菱重工業(株) 名古屋研究所 | 高見勲教授 | 非線形系制御の研究 |
| 三菱電機(株) 情報技術総合研究所 | 青山幹雄教授 | S/W 部品開発評価技術 |
| (株) 東芝 研究開発センター | 青山幹雄教授 | エージェントサービス連携技術の研究 |
| 東邦ガス(株) 総合技術研究所 | 後藤邦夫教授 コナド・キニ講師 | ニュートラルネットワークの学習の高速化・効率化 |

| 会社名等 | 寄付金使用者 | テーマ |
|---------------------|---------|----------------------|
| コネチカット大学 | 村杉恵子助教授 | 日本語の統語的形態論に関する文法獲得研究 |
| (株) 東芝 社会・産業システム事業部 | 長谷川利治教授 | 知的交通システムに関する研究 |
| 三菱重工業 (株) 神戸造船所 | 高見勲教授 | 標識車視認性評価方法 |

| 委託会社名等 | 受託研究者 | テーマ |
|---------------------|--------|-------------|
| (株) 東芝 S I 技術開発センター | 伏見正則教授 | 乱数検定法の数学的研究 |